

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第32集

はる つじ
原の辻 遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書





カラー写真1 勾玉



カラー写真2 勾玉出土状況



カラー写真3 調査区遠景



カラー写真4 調査区近景 (1)



カラー写真 5 調査区近景 (2)



カラー写真 6 基本土層 (2A 区西壁)



カラー写真7 1号土坑（2B区西から）



カラー写真8 9号ピット・10号ピット・11号ピット（2A区西から）



カラー写真9 溝状遺構（1A区東から）



カラー写真10 1A区2層遺物出土状況（南から）



カラー写真11 2A区2層遺物出土状況（西から）



カラー写真12 4A区2層・溝状構造物出土状況（北から）

発刊にあたって

本書は、国庫補助を受けて実施した、平成29年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は、これまでの調査で、多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに、中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支國」の國邑と特定されました。 「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが、国邑が特定されたのは原の辻遺跡だけで、当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡とされ、平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で3例目の特別史跡として指定を受けました。また、昭和49年以降の発掘調査で出土した原の辻遺跡の遺物の中で、遺構や場所が明確で遺跡の時代や対外交流の歴史を裏付けることができる資料1670点が、平成25年6月に重要文化財に指定されました。

平成29年度の範囲確認調査は、壱岐市石田町石田西触で実施しました。その結果、土坑やピットなどが確認されるとともに、勾玉などの遺物が出土し、墓域周辺の土地利用の様相を明らかにする上での貴重な成果を得ることができました。

発掘調査の実施に当たり、御理解と御協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成31年3月25日

長崎県教育委員会教育長

池 松 誠 二

例　　言

1. 本書は、原の辻遺跡調査研究事業として実施した、平成29年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。
2. 本事業は、遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として、平成14年度から実施している。
3. 本書に収録した調査区の所在地は、長崎県壱岐市石田町石田西触である。
4. 平成29年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室が担当した。

調査組織

調査指導委員会 委員長 西 谷 正（九州大学名誉教授）
委 員 大 坪 志 子（熊本大学埋蔵文化財調査研究センター准教授）
委 員 工 樂 善 通（大阪府立狭山池博物館館長）
委 員 佐 古 和 枝（関西外国语大学教授）
委 員 徐 光 輝（龍谷大学教授）
委 員 高 倉 洋 彰（西南学院大学名誉教授）
委 員 武 末 純 一（福岡大学教授）
委 員 村 上 恭 通（愛媛大学教授）

〔委員記載は50音順〕

長崎県埋蔵文化財センター

所　　長（～平成30年3月）	岩 永 正 弘
所　　長（平成30年4月～）	石 橋 明
東アジア考古学研究室長（～平成30年3月）	川 道 寛
東アジア考古学研究室長（平成30年4月～）	寺 田 正 剛
東アジア考古学研究室 主任文化財保護主事	古 澤 義 久（調査・整理担当）
東アジア考古学研究室 文化財保護主事	長 岡 康 孝（調査担当）
調 査 課	主任文化財保護主事 山 粒 千 晶（調査補助）

5. 本書で使用した遺構・遺物の実測、製図、写真撮影は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。
6. 本書に収録した遺物・図面・写真類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書で用いた座標は旧日本測地系である。
8. 本書で用いた方位は座標北である。
9. 本書の韓国語要旨の校閲は金恩瑩氏（釜山市庁文化遺産課）に依頼した。また、中国語要旨の翻訳は王達来氏（内蒙古大学）に依頼した。
10. 本書の執筆は「地理的環境」、「調査の経緯と進行」を長岡康孝、「歴史的環境」、「出土石器」を寺田正剛、残りを古澤義久が行った。
11. 本書の編集は古澤義久が行った。

本文目次

I 遺跡の立地する環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
3. 民俗的環境	7
II 調査の経緯と進行	8
III 原ノ久保地区的調査	10
1. 原ノ久保地区におけるこれまでの調査	10
2. 調査概要	12
3. 基本層序	14
4. 遺構及び出土遺物	14
(1) 土坑	
(2) ピット	
(3) 溝状遺構	
5. 包含層および出土遺物	36
(1) 2' 層	
(2) 2 層	
6. 近現代層から出土した弥生土器	46
(1) 3B 区近代搅乱及び近・現代土層出土弥生土器	
(2) 4B 区南壁搅乱出土弥生土器	
7. 出土石器	55
8. 出土中世～近代遺物	58
(1) 陶磁器	
(2) 銭幣	
IV 総括	62
韓国語・中国語要旨	71
付 編	
原の辻遺跡出土「勾玉」の科学的調査	(長崎県埋蔵文化財センター 片多 雅樹)
平成29年度原の辻遺跡調査研究事業発掘調査における自然科学分析	(パレオ・ラボ)

挿図目次

図1	壱岐島位置図	2
図2	内海湾周辺弥生時代遺物採集地	2
図3	壱岐島内の弥生時代墳墓遺跡	4
図4	原の辻遺跡周辺の弥生時代墳墓遺跡	5
図5	原の辻遺跡の主な墓域	5
図6	平成29年度調査研究事業調査区位置図（1/8,000）	9
図7	これまでの原ノ久保地区における調査と今次の調査区	11
図8	2017年度原ノ久保地区調査区全体図	13
図9	1A区平面図・土層図	15
図10	1B区平面図・土層図・2層遺物出土状況	16
図11	1C区平面図・土層図	17
図12	2A区平面図・土層図	18
図13	2B区平面図・土層図・2層遺物出土状況	19
図14	2C区平面図・土層図	20
図15	3B区平面図・土層図・2層遺物出土状況	21
図16	3C区平面図・土層図	22
図17	4A区平面図・土層図	23
図18	4B区平面図・土層図	24
図19	4C区平面図・土層図	24
図20	1号土坑	25
図21	1号土坑出土遺物	26
図22	2号土坑・ピット(1)	28
図23	ピット(2)	31
図24	溝状遺構（1A区）	34
図25	溝状遺構出土遺物・4B区2'層出土遺物	35
図26	1A区2層遺物出土状況(1)	38
図27	1A区2層遺物出土状況(2)	39
図28	2A区2層遺物出土状況	40
図29	4A区2層遺物出土状況	41
図30	4B区2層・2'層遺物出土状況	42
図31	1A区・1B区2層出土遺物	43
図32	2A区2層出土遺物	44
図33	2B区・3B区・4A区・4B区2層・3B区近代土層出土遺物	45
図34	4B区搅乱出土遺物(1)	47
図35	4B区搅乱出土遺物(2)	48

図36 4B区攪乱出土遺物(3).....	49
図37 出土石器図.....	56
図38 出土陶磁器(1).....	59
図39 出土陶磁器(2).....	60
図40 出土近代銭幣.....	60
図41 2000年度調査区小堀壇.....	62
図42 1996年度調査原ノ久保D区	64
図43 2017年度調査区周辺状況.....	65
図44 原の辻遺跡出土勾玉（番号は表4と対応）.....	67

表 目 次

表1 原ノ久保地区調査区地点一覧.....	11
表2 土器観察表.....	51
表3 石器観察表.....	57
表4 原の辻遺跡出土勾玉.....	68

写 真 目 次

カラー写真1 勾玉	
カラー写真2 勾玉出土状況	
カラー写真3 調査区遠景	
カラー写真4 調査区近景（1）	
カラー写真5 調査区近景（2）	
カラー写真6 基本土層（2A区西壁）	
カラー写真7 1号土坑（2B区西から）	
カラー写真8 9号ピット・10号ピット・11号ピット（2A区西から）	
カラー写真9 溝状遺構（1A区東から）	
カラー写真10 1A区2層遺物出土状況（南から）	
カラー写真11 2A区2層遺物出土状況（西から）	
カラー写真12 4A区2層・溝状遺構遺物出土状況（北から）	
写真1 コーレー神.....	7

I 遺跡の立地する環境

1. 地理的環境

原の辻遺跡の所在する壱岐島は、長崎県の北部、九州北西海上の玄界灘に浮かぶ島である。東西約15km、南北約17km、総面積約138.57m²の本島と28の付属島からなり、芦辺、石田、勝本、郷ノ浦の4町で壱岐市を構成している。総人口は26,820人（平成30年12月末）である。小規模な島であるが、九州の西海岸から韓半島・中国北部へと通ずる海上の要衝であった。文献にも古くから登場している。3世紀の弥生期を知ることができる中国の歴史書『三国志魏書東夷伝倭人条』で「一大國」、8世紀に記された日本最古の歴史書『古事記』でも「伊伎島」と記されている。壱岐の島名については、上記以外にも、『日本書紀』で「壹岐島」、「万葉集」では「由吉能之麻」、「倭名類聚抄」では「由岐島」などさまざまな標記がある。由来について「此島に雪ノ白浜と云う地ありて、遠方より望めば雪ノ如く見ゆ。是れ名の起りかと云えり」と『郡都考』にあることから、筒城浜などの砂浜を引き合いに出して、雪の島と実証しようとする議論もあったが、仮名文字がなかった時代に漢字の音をかりて表記しただけで、文字の意味とは関係がなく、東に勢力をのばして行った日本民族の国造りの活動の中で指呼した名称で「往きの島」「いきの島」に由来すると考えられる（山口1982）。壱岐島で最も標高が高い212.9mの岳ノ辻から周囲を一望すると、直線距離で約26kmと最も近い佐賀県の呼子方面は常に見ることができる。空が澄んでいると、北西に約60kmの位置にある対馬や北東に約66kmの位置にある沖ノ島を望むことができる。

壱岐島の海岸の地形は、北岸と南岸には大きな湾入はみられないものの、大規模な海蝕崖が集中している。西海岸はリアス式海岸で湯の本湾、片苗湾、半城湾、梅津湾などは湾中にさらに小湾をもっており、出入りの激しい複雑な地形であるのに対し、東海岸は単調で砂浜が発達しており、海岸砂丘を形成している。

原の辻遺跡は諫早平野につぐ長崎県内で2番目の広さをもつ約300haの沖積平野、深江田原平野に石田町側から北へ舌状に伸びた低平な丘陵部とその周辺の低地部からなり、面積は100haである。原の辻遺跡が所在する深江田原平野は100m前後の玄武岩台地に開まれた盆地状の地形である。従って、その玄武岩台地に遮られて、外洋から原の辻遺跡を望むことはできない。また、国内の弥生時代の遺跡をもつ他の都市と比べ、壱岐は都市開発が進んでいないことに加え、復元整備の際に、電柱を地中に埋めるなどの工夫も相まって、比較的弥生時代に近い景観を保っているのが原の辻遺跡の特徴である。その原の辻遺跡は内海湾から幡鉢川を1.5kmほど遡ったところにある。外洋から原の辻遺跡に向かうには、壱岐島東南部の八幡半島から内海湾に入り、赤島、青島、小島神社を経て幡鉢川の河口を目指したと考えられる。島外から渡航してきた集団が大型船で運んできた物は一旦内海湾で小舟に積み替えて、原の辻まで搬入したと考えられるが、それがどこで行われたのかは定かではない。幡鉢川の河口に近い内海湾一帯にある弥生時代の遺跡はあまり多くはないが、堂崎遺跡（安楽・川畠・古澤2014）、天水遺跡や青島遺跡、小島神社の周辺で弥生土器などを採取することができる（古澤2018）。

[引用・参考文献]

安楽勉・川畠敏則・古澤義久2014「壱岐市石田町堂崎遺跡採集資料」「長崎県埋蔵文化財センター研究紀要」

4

古澤義久2018「壱岐市芦辺町青島遺跡採集資料」「島の科学」55

山口麻太郎1982『壱岐國史』長崎県壱岐郡町村会。

横山順1990「壱岐の古代と考古学」「玄界灘の島々」



図1 壱岐島位置図



図2 内海湾周辺弥生時代遺物採集地

2. 歴史的環境 ～壱岐における弥生時代の墳墓遺跡を中心として～

原の辻遺跡は、旧石器時代、弥生時代前期から古墳時代前期、奈良時代までの遺構・遺物を包蔵する複合遺跡である。特に弥生時代中期から後期にかけての多重にめぐる環濠集落や船着き場跡など、組織力と高度な技術を駆使して構築された遺構や、中国・朝鮮半島や国内の他地域との交流を物語る豊富な出土遺物は、全国でも類を見ない。

平成29年度の発掘調査は、原ノ久保地区という昭和52年度に墓地として確認された地域である。ここで壱岐島内における弥生時代の墳墓遺跡の状況についてまとめてみたい。

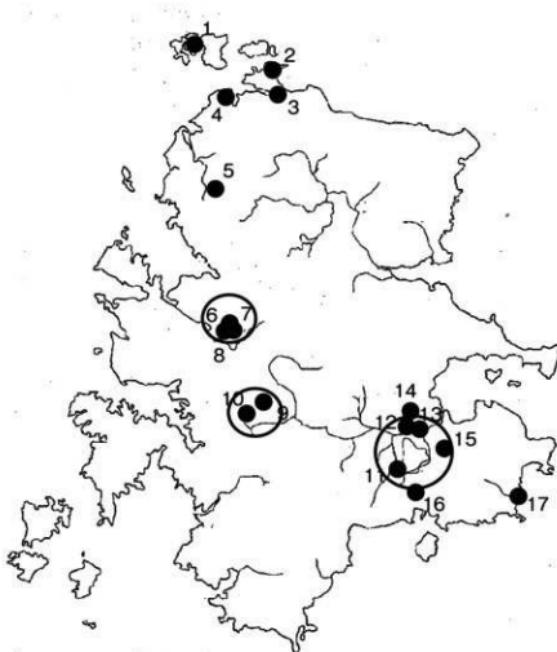
図3の地図は壱岐島内の弥生時代の墳墓遺跡の分布図である。これまで周知されている遺跡数は20ヶ所程度であり、古墳の数に比べるとはるかに少ない。遺跡の立地としては大きく海岸部と内陸部に分けられるようである。

島の北端部に集中する遺跡はほぼ海岸に面している。天ヶ原石棺墓群（3）は、玄界灘に面する海岸部に迫り出した丘陵先端上に立地しており、その下の海岸の波打ち際にある石洞の下に中広銅矛3本が埋納されていたといわれている。一方、島の東側海岸部に唯一確認されている大久保遺跡（17）は、大浜海岸から海に張り出した岬上にあり、上部構造に積石をもつ箱式石棺が発見されている。棺内には横臥屈葬の成人骨が残存しており、副葬品等はなかった。いずれの墳墓遺跡も海を意識した被葬者を埋葬するために作られたものと考えられ、墓地として単独で成立する遺跡という性格である。

内陸部にある墳墓遺跡は環濠を有する集落遺跡に隣接するところにある。牛神遺跡・国柳遺跡・小場遺跡（6～8）はカラカミ遺跡の周辺にあり、時期においてもカラカミ遺跡の成立以前やその後の広がりを判断することができる遺跡群といえる。高松遺跡・山中遺跡（9・10）は車出遺跡群の北側にあたり関連が予想できる。ただ、車出遺跡群の範囲が十分に確定されておらず、地形の改変等も著しいことから、これらの遺跡がどのような位置づけになるかは今のところ不明である。

鶴田遺跡ほか5遺跡（11～16）は原の辻遺跡周辺に所在している。鶴田遺跡（11）は原の辻遺跡西側の低丘陵上にある壺棺墓を主体とする遺跡である。弥生時代中期前葉から中葉の時期に限定される12基の壺棺墓が検出されており、生活容器を転用した合口壺棺が中心の墓地である。一方、閑縁遺跡・松尾遺跡・清水遺跡は原の辻遺跡の北側の高台周辺にある遺跡群であり、その近隣には竪穴系石室を有する古墳数基が所在している。閑縁遺跡（12）は箱式石棺墓、壺棺墓、石蓋土壙墓など27基の墳墓により形成された墓地で、詳細な記録はないが調査時の写真等から判断すると弥生時代中期前葉から後期初頭にかけての墓地と推測できる。シメの辻遺跡（15）は原の辻遺跡東側にある遺跡で、土取りにより合口壺棺と赤色顔料が付着した箱式石棺が発見されたといわれている。また、原の辻遺跡南側にある津の宮遺跡（16）からは開墾中に石棺と壺棺が発見されており、碧玉製の勾玉や小玉などが出土したといわれている。

原の辻遺跡内においてはこれまでの調査で6ヶ所の墓域〔註1〕が確認されている。石田大原地区（A）は原の辻遺跡最大の墓域であり、壺棺墓77基、石棺墓21基、土壙墓10基が確認されている。壺棺の時期から判断すると弥生時代前期後半から後期前半まで営まれた墓域である。石棺墓は墓域の北側に集中し、壺棺墓と主軸を描えて共伴し、一方、土壙墓は墓域の南側に分布する。区画や墓制の変遷を判断することができる重要な墓域といえる。大川地区（B）は遺跡東側に突出した丘陵上に位置し、石棺墓15基、壺棺墓19基、土壙墓18基がこれまでに確認されている。石棺墓は長軸が長いもので



	遺跡名	立地		遺跡名	立地
1	若宮島石棺群	丘陵	12	閑縹遺跡	丘陵
2	オオタキ遺跡	丘陵	13	松尾遺跡	台地
3	天ヶ原石棺墓群A地点	丘陵	14	清水遺跡	丘陵
4	正村遺跡	砂嘴	15	シメの辻遺跡	台地
5	東ノ木遺跡	丘陵	16	津の宮遺跡	丘陵
6	牛神遺跡	丘陵	17	大久保遺跡	岬
7	国柳遺跡	丘陵			
8	小場遺跡	丘陵			
9	高松遺跡	台地			
10	山中遺跡	台地			
11	鶴田遺跡	丘陵			

図3 巻岐島内の弥生時代墳墓遺跡



図4 原の辻遺跡周辺の弥生時代墳墓跡



図5 原の辻遺跡の主な墓域
[志賀市作成図面に加筆]
A…石田大原 B…大川 C…原ノ久保

2m以上あり、列状の配置が確認されている。長軸の長さから伸展葬が可能であり、周辺に確認される壺棺の時期から判断すると、弥生時代後期前半から後半にかけての墓域と考えられる。墓域の最頂部には長軸3.1m、短軸2.2mの隅丸長方形の墓壙に、長軸2.0m、短軸0.7mの法量があり棺蓋に標石を持つ箱式石棺墓が確認されている。棺内は全掘しておらず副葬品等は見当たらなかったが、規模や構造から考えると首長クラスの墳墓の可能性が高い。

今回の調査区である原ノ久保地区（C）は原の辻遺跡の南側にあたり、これまでに3つの墓域が確認されている。原ノ久保A地区（C）は箱式石棺墓13基、石蓋土壙墓5基、壺棺墓3基が確認されている。壺棺の時期から判断すると弥生時代後期中ごろから後半にかけての時代が想定され、大川墓域とはほぼ同時期と考えられる。ただ、長宜子孫銘内行花文鏡をはじめ棺内外から多くの鏡や青銅器、玉類等多数出土しており、両墓域の関係性は改めて検討すべきことと考える。

原の辻遺跡の墓域はほとんどが集落の周辺を包む環濠（内濠）の外側にある。特に環濠が改めて整備された後期以降は完全に集落の南側に配置されている。このことは明らかに墓域と居住域を意識的に隔絶した構造であり、従来から指摘されてきたとおりである〔註2〕。ただ、環濠内外の丘陵全体において小規模な墓地が確認された事例は多数あり、墓地の時期と環濠の整備、副葬品などからみる墳墓の格差などを判断した上での検証が必要であると感じる。

〔註1〕 墓域の数についてはさまざまな解釈があり定まっていない。ここいう6ヶ所の墓域とは遺跡内の丘陵上に位置する、石田大原地区、大川地区、原ノ久保地区（A地区・B地区）、萱ノ木地区、柏田地区である（図5のとおり）。

〔註2〕 宮崎貴夫氏が、「日本の遺跡32 原の辻遺跡－壱岐に甦る弥生の海の王都－」（同成社2008）の中で、墓域について述べられている。

【参考文献】

- 平川敬治編1985「串山ミルヌ浦遺跡－第1次調査報告書－」勝本町文化財調査報告書第4集
藤田和裕1988「長崎県埋蔵文化財調査集報XⅠ II 大久保遺跡」長崎県文化財調査報告書第91集
宮崎貴夫編1999「原の辻遺跡 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
安楽 勉1999「閑繩遺跡 輪鉢川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第17集
安楽 勉編2001「原の辻遺跡 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅲ」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集
河合雄吉2002「原の辻遺跡－保存整備事業に伴う発掘調査報告書－」石田町文化財調査報告書第5集
福田一志・中尾篤志編2005「原の辻遺跡総集編Ⅰ－平成16年度までの調査成果－」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
田中聰一・松見裕二・山口 優編2008「特別史跡 原の辻遺跡－史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査－」壱岐市文化財調査報告書第12集

3. 民俗的環境

原の辻遺跡が所在する深江田原平野を見下ろす周辺丘陵にある墓地付近で、興味深い民間信仰がみられるので、ここで触ることとする。

【コーレー神】

芦辺町深江栄触字中辻に所在する。この丘陵一帯を大岳（おおたき）と呼ぶ。丘陵頂部に近い墓地の一角に立地する。約30cm 大程度の礫を平面隅丸方形状に高さ50cm 程度積みあげた積石の上に石祠が載せてある（写真1）。石祠には東側面に「□□ 文化八」、西側面に「□六月九日 山



写真1 コーレー神

西□」と刻まれている。『壱岐国続風土記』（寛保2（1742）年）や『壱岐名勝図誌』（文久元（1861）年）にコーレー神についての記載はない。石祠がコーレー神に奉納されたものだとすると、文化8（1811）年には既に存在したこととなる。

このコーレー神は「歯のつつき神」ともいわれ、以前は歯痛などの快癒のために周辺集落の信仰を集めましたが、現在では参拝する人も少なくなった。壱岐島には歯痛の神が国分本村触、湯岳今坂触、石田南触、志原南触、片原触などにみられ「歯つつき神」や「歯うずき神」などと呼ばれている（壱岐文化財調査委員会編1975）。コーレー神もこの一種であるとみられるが、本例以外にコーレー神と呼ばれる例はあまり知られていない。

コーレー神とは元来「高麗神」ではないかという。その場合、壱岐島各所でみられる唐人神との関連も考えられる。唐人神信仰は、玄界灘周辺で多くみられる漂着死体・水死体を祀るえびす信仰との関連も想定されている（波平1990）。但し、漂着死体等に基づく唐人神やえびす神は壱岐島では浦と呼ばれる漁村部で多く確認されるが、本稿で触れた事例は在と呼ばれる農村部での信仰である。この点では、農村部における信仰の変容を考える必要があるが、それでも異人に対する信仰は壱岐島全島的なものであることを示しているものと考えられる。異人が富（御利益）をもたらすという観念は、信仰だけでなく、壱岐島に伝承された民話の中にも多く指摘することができ（古澤2012）、壱岐島では特に強く顯れる民俗的心性ではなかったかと考えられる。

本稿をなすにあたっては山西寅氏から多くの御教示を賜わった。記して感謝申し上げる。

壱岐文化財調査委員会編1975『壱岐島の民間信仰神』

波平恵美子1990『漁民のケガレ観念と女神信仰』『海と日本列島第3巻 玄界灘の島々』小学館

古澤義久2012『壱岐の昔話にみられる富と異人』『島の科学』49

II 調査の経緯と進行

1. 調査の経緯

原の辻遺跡は、毫岐在住の小学校教諭松本友雄によって明治37年（1904年）頃に発見された。本格的な調査が行われるようになったのは、戦後の昭和26年（1951年）～39年（1964年）に九学会と東亜考古学会によってである。しかし、昭和30年代から昭和40年代にかけて、原の辻の台地は大きく変貌する。急速に押し寄せた農業近代化の波は畠地を水田化し、旧地形の復元は困難なほどに変容して遺跡の大半は消滅を余儀なくされた。昭和49年（1974年）に石田大原地区において耕地基盤整備に伴い長崎県教育委員会によって緊急調査が実施された。この時の調査では弥生時代中期を主体とする墓域が確認された。この発見に伴い、長崎県教育委員会は昭和50年（1975年）～52年（1977年）に範囲確認調査を実施している。

幡鉾川流域総合整備事業に伴う平成3年（1991年）～4年（1992年）の遺跡周辺の低地一帯を対象とした範囲確認調査を経て平成5年（1993年）以降、広大な面積の発掘調査が実施された。その結果、遺跡は100haの範囲にも及び、台地を多重環濠で囲む大規模環濠集落であることが判明した。平成7年（1995年）には、原の辻遺跡が『魏志』倭人伝に記された「一支国」の国邑であることが確定し、平成8年（1996年）には、弥生時代中期前半に築かれた日本最古の船着き場跡が発見された。この一連の発掘調査の成果により、平成9年（1997年）に原の辻遺跡は国史跡に指定され、平成12年（2000年）には特別史跡に指定された。平成14年（2002年）以降は、原の辻遺跡の集落構造の把握を目的とした調査研究事業が進められている。

今年度は原の辻遺跡の南側に位置する原ノ久保地区の調査を行った。この地区では、昭和52年（1977年）に範囲確認調査が実施され、石棺が検出された（安楽・藤田1978）。平成8年（1996年）には、墓域の広がりや墳墓の構成の調査を目的として範囲確認調査が行われ、調査の結果、墳墓の主体が箱式石棺墓であることや墓域が東西100m、南北150mの範囲に広がっていること、多くの副葬品を伴っていることが明らかとなった（宮崎・安楽・西・杉原1999）。この後も、原ノ久保地区においては、数度にわたる発掘調査が実施された。

このような調査経緯を踏まえ、原の辻遺跡における弥生時代の墓域のさらなる解明を目的として今年度の調査を実施した。

2. 調査の進行

今年度は、平成29年（2017年）11月1日から12月27日まで調査を実施した。調査開始日の11月1日から発掘作業員を雇用、調査区の設定を行った。今年度の調査区においては、遺物包含層までの深さがそれほどないことが予想されたため、バックホウによる掘削は実施せず、人力による発掘を進めた。調査1週間程度で西側のいずれの調査区からも明るい赤色土の中に礫が散見され、弥生の包含層は確認されなかった。11月22日1a・1b区北側、2a・2b区南側の擾乱跡が平成13年（2001年）に児童墓が出土している11区であることが判明した。11月24日には調査区を反転させる前の航空写真撮影を実施した。また今回の調査区の南側で以前、多数の遺物を見た、という証言に基づき、新たに別の地権者から土地利用の承諾を得て、調査区を更に南側へ拡張した。反転した後、12月8日4a区に平

成11年（1999年）の調査区、E構を確認した。12月11日、原の辻遺跡調査指導委員会が開催され、指導委員から現地指導を得た。12月21日には2度目の航空写真撮影を行った後、1a区と4a区の間にトレンチを入れ、E構を確認すると共に、4a区から2b区に溝状の遺構が繋がっていることを確認した。12月25日より人力による埋め戻しを開始、それと並行して、12月27日まで調査を続けた。12月27日4b区の南壁の搅乱を調査、土器片が重ねられた状態で多数出土した。バックホウで地盤を固めた後に、再度掘り返した。年を越した2月21日にトラクターで10~12cmの深さで耕し、水はけがよくなるように少し真ん中を鎧壠状に高くして現状復旧した。

発掘調査期間中には、11月15日に長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コースの生徒（1年生12名）が発掘体験原の辻遺跡発掘体験実習として発掘調査に参加した。また、11月9日に福泉博物館河仁秀（ハ・インス）館長が視察に来られた。



図6 平成29年度調査研究事業調査区位置図（1/8,000）

III. 原ノ久保地区の調査

1. 原ノ久保地区におけるこれまでの調査

原ノ久保地区（原ノ久保A地区）では、これまで数次にわたる調査が実施されている（図7、表1）。

1977（昭和52）年度の範囲確認調査では、23箇所の試掘坑がされ、調査された。第16試掘坑では1層：耕作土、2層：黒褐色土層（耕作土）、3層：黒色土層、4層：褐色粘質土層、5層：赤褐色粘土質土層という層序を示す。3層はやや褐色がかった破碎礫を含む黒色土層で、擾乱された可能性が強いとされる。第4層は東から西へ傾斜がみられ厚みを増すとされ、上部はやや茶褐色がかり、さらりとした感があり、石核、剥片が認められた。5層は玄武岩質のものい大小の礫を含み、地山層となる。第15試掘坑および第17試掘坑では遺物包含層はみられないと報告されている。第12試掘坑では表土や埋土の下で厚さ20cm程度の黒色土層がみられる。須玖II式土器片が出土している。土壙墓の可能性がある黒褐色土層から鉄鏃3点が出土している。

1996年度の調査ではA～C区で遺構・遺物とも確認されなかった。D区では箱式石棺墓13基、石蓋土壙墓5基、土壙墓1基、甕棺墓3基、土壙8基、集石遺構、溝が検出された。遺物としては弥生土器、石器、鉄器、青銅器、装飾品が出土している。E区は今次の調査区と重複する箇所であるが、溝が検出されている。G区では弥生土器が出土した。F区では箱式石棺墓1基、甕棺墓1基が検出された。甕棺は弥生時代後期前葉から中葉にかけての所産である。厚さ12cm前後の弥生時代包含層が確認され、この包含層下面の標高は14.60m程度である。

1998年度の調査では、1～5区が配置されている。2区以外では表土を除去すると無遺物層または埋土で、包含層は削平されていた。1区及び2区では土地所有者の話では昭和30年代に畑の整地をした際、石棺や甕が出土したという。2区では厚さ24cm前後の弥生時代包含層が確認され、この包含層の下面の標高は13.3cm程度である。集石と柱穴が確認された。2区周辺では須玖II式口縁部などが表面採集されている。

2000年度の調査では1～14区までの調査区が設定された。今次の調査地点に隣接した1区と2区では包含層は未確認である。埋土に黒い土が混じり、弥生土器片がわずかに含まれていた。3区でも包含層は未確認である。5区は1996年度のD区の北側にあるが、表土下は無遺物層で、石棺の抜き取り痕もないことから墓域は広がっていないと判断された。4区は今次の調査区の北側にあるが、瓦粘土採取のため削平を受け、客土が盛られていたが、客土中よりガラス玉8点が採集された。6区も無遺物層まで擾乱を受けている。7区では溝状遺構が確認されている。10区では小児甕棺墓1基が確認されている。11区は今次の調査と重複する箇所であるが、須玖II式の小児甕棺墓が1基確認されている。12区では箱式石棺または石蓋土壙墓1基が確認された。

2003年度の石田町教育委員会による範囲確認調査は詳細な記録がなく、不詳であるが、弥生土器、黒曜石210点が出土したとされる。

2004年度の壱岐市教育委員会による調査では原ノ久保A地区南西隅に調査区が設定された。表土下は造成土で、造成土の下は無遺物層であった。

2004年度の長崎県教育委員会による調査では、A～F調査地までの6調査地が設定された。A調査



図7 これまでの原ノ久保地区における調査と今次の調査区（表1の番号と対応）

表1 原ノ久保地区調査区地点一覧

番号	調査年度	調査主体	報告	報告書番号
①	1977(昭和52)年	長崎県教育委員会	安楽・藤田編1978	NK37
②	1996(平成8)年	長崎県教育委員会	宮崎ほか1999	NH11
③	1998(平成10)年	長崎県教育委員会	安楽・宮崎・杉原2000	NH18
④	2000(平成12)年	長崎県教育委員会	安楽・町田・藤村2001	NH22
⑤	2003(平成15)年	石田町教育委員会	—	—
⑥	2004(平成16)年	壱岐市教育委員会	松見2005	IS03
⑦	2004(平成16)年	長崎県教育委員会	林2006a	NH32
⑧	2005(平成17)年	長崎県教育委員会	林2006b	NH34
⑨	2006(平成18)年	壱岐市教育委員会	田中・山口2007	IS11
⑩	2011(平成23)年	長崎県教育委員会	林・宮武2012	MN05
⑪	2014(平成26)年	長崎県教育委員会	川道・古澤編2015	NM14

地ではピット群と溝状遺構が発見された。B調査地では表土下は岩盤であった。C調査地では表土下は岩盤であった。D調査地では土壌1基が発見された。E調査地では古代の住居跡1基、ピット群、土坑が確認された。F調査地では古代の埋甕土坑、ピット群が確認された。

2005年度の長崎県教育委員会による調査では、B調査地、C調査地の2箇所が原ノ久保地区に設定された。B調査地では弥生時代包含層が確認された。C調査地は1996年度調査D区の東側にあたる。弥生時代包含層が確認されたが、遺構等は確認されず、1996年度D区の墓域の広がりはC調査区まで及んでいないことが明らかとなった。

2005年度の壱岐市教育委員会による調査では、既に搅乱・削平を受けている状況が明らかとなり、弥生時代包含層は確認されなかった。

2011年度の長崎県教育委員会による調査では、南北15m、東西20mの300m²が調査されたが、弥生時代の遺構は確認されていない。弥生時代の遺物としては表土及び不明遺構から弥生時代中期後半の甕、中期後半から後期初頭の壺、後期前半の壺が採集された。

2014年度の調査では、南北25m、東西20mの500m²が調査されたが、弥生時代の遺構は確認されていない。後期旧石器時代（ナイフ形石器文化期）の土坑2基が確認され、ナイフ形石器、原の辻型台形石器などが出土した。

安楽勉・藤田和裕編1978『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第37集

安楽勉・藤村誠・小玉友裕・中尾篤志2002『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集

安楽勉・町田利幸・藤村誠2001『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集

安楽勉・宮崎貴夫・杉原敦史2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集

川道寛・古澤義久編2015『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第14集

田中聰一・山口優2007『天手長男神社遺跡原の辻遺跡カラミ遺跡』壱岐市文化財調査報告書第11集

林隆広2006a『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第32集

林隆広2006b『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第34集

林隆広・宮武直人2012『原ノ久保地区』『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第5集

松見裕二2005『原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第3集

宮崎貴夫・安楽勉・西信男・杉原敦史1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集

2. 調査概要

調査区は、5m×5mのグリッドを基本としつつ、地形に合わせて、調査区を設定した。1A区、1B区、1C区、2B区、2C区は5m×5mの正方形、2A区は短辺5mの二等辺三角形、3A区、3B区は3m×5mの長方形、4A区は5m×4mの長方形、4B区、4C区は2m×5mの長方形の調査区である。表土より人力で掘削した。土層堆積状況の確認のため北と東を50cmベルト状に掘り残している。但し、1B区東壁の南50cm分は、溝状遺構の観察のため、掘削調査した。

発掘調査の結果、土坑2基、ピット13基、溝状遺構1条が発見された。調査終了後は、掘削面に砂を5cm程度、敷いた上で埋め戻し、遺構等の保護を行った。

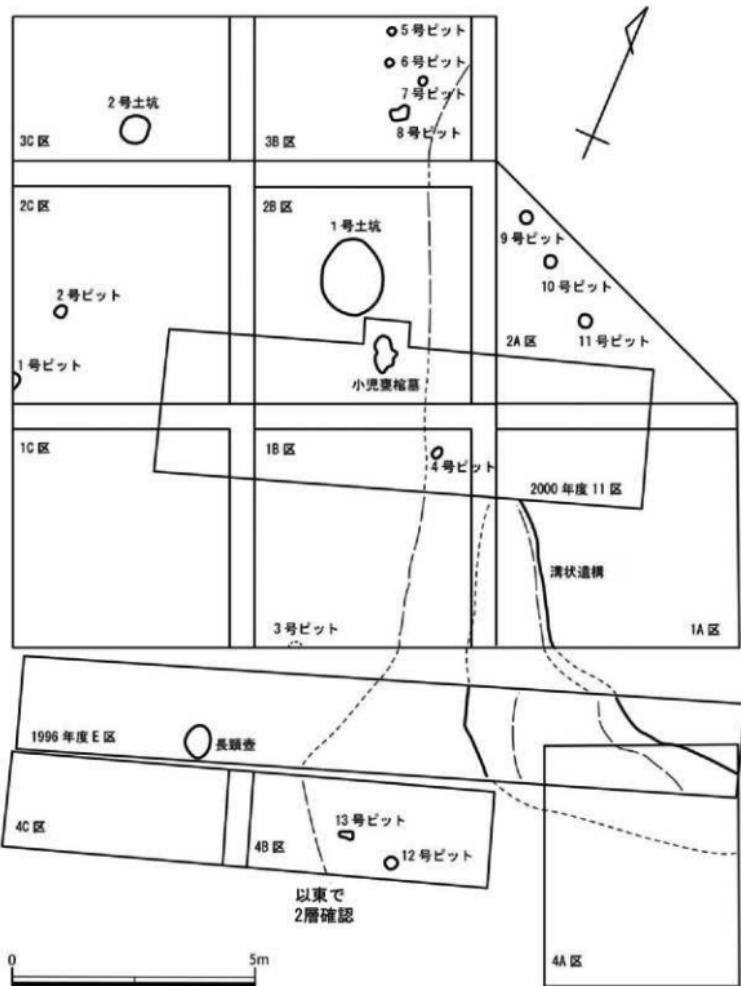


図8 2017年度原ノ久保地区調査区全体図

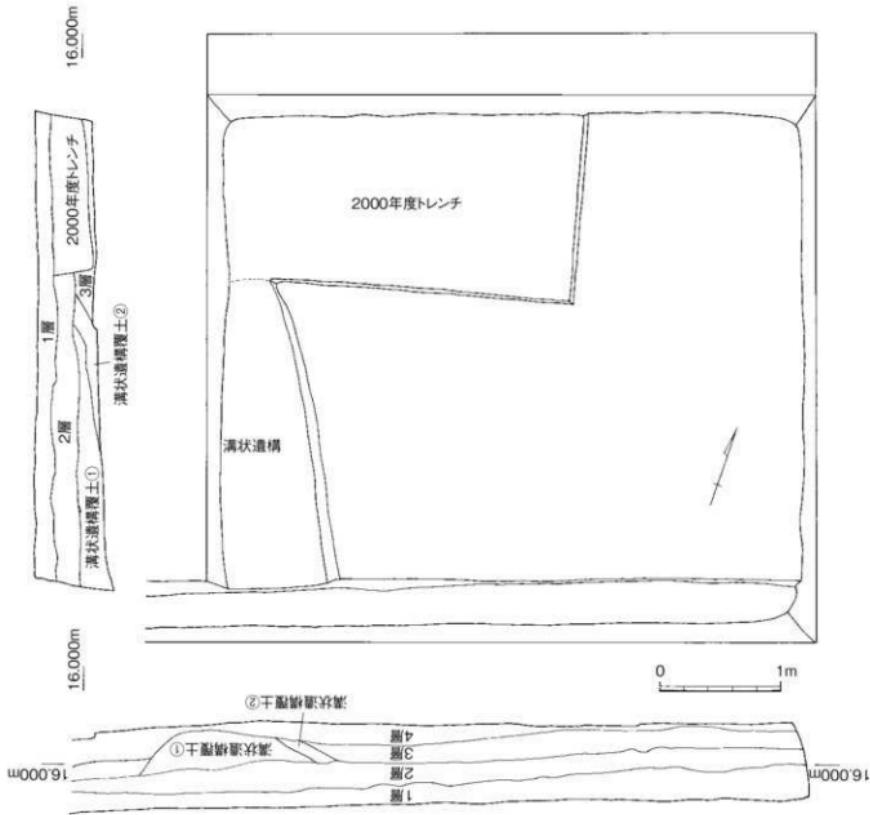


図 9 1 A 区平面図・土層図

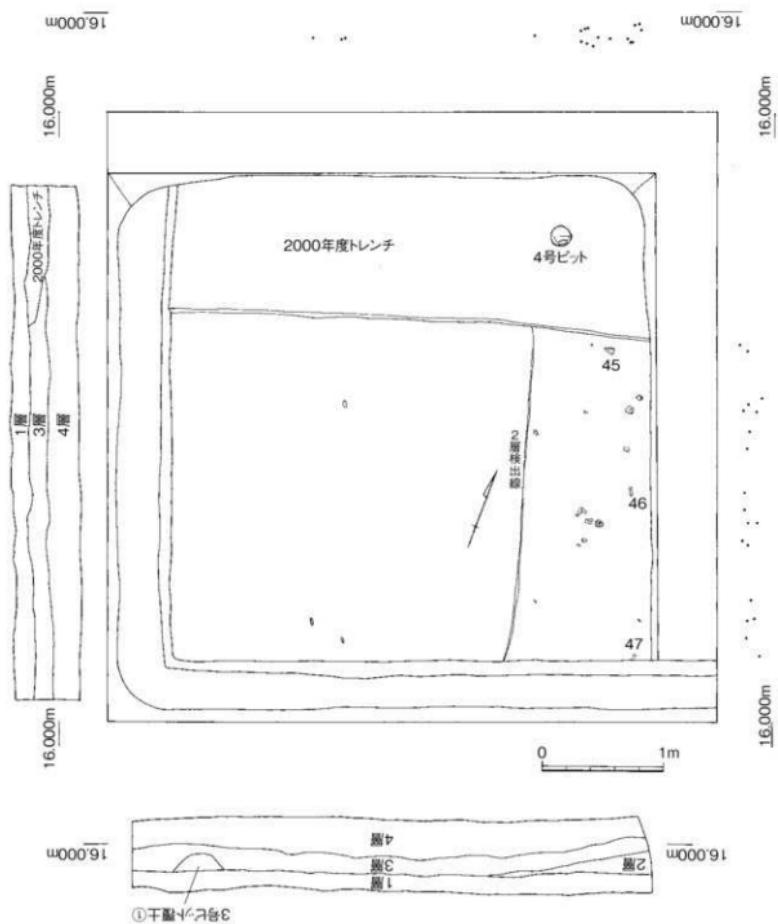


図10 1B区平面図・土層図・2層遺物出土状況

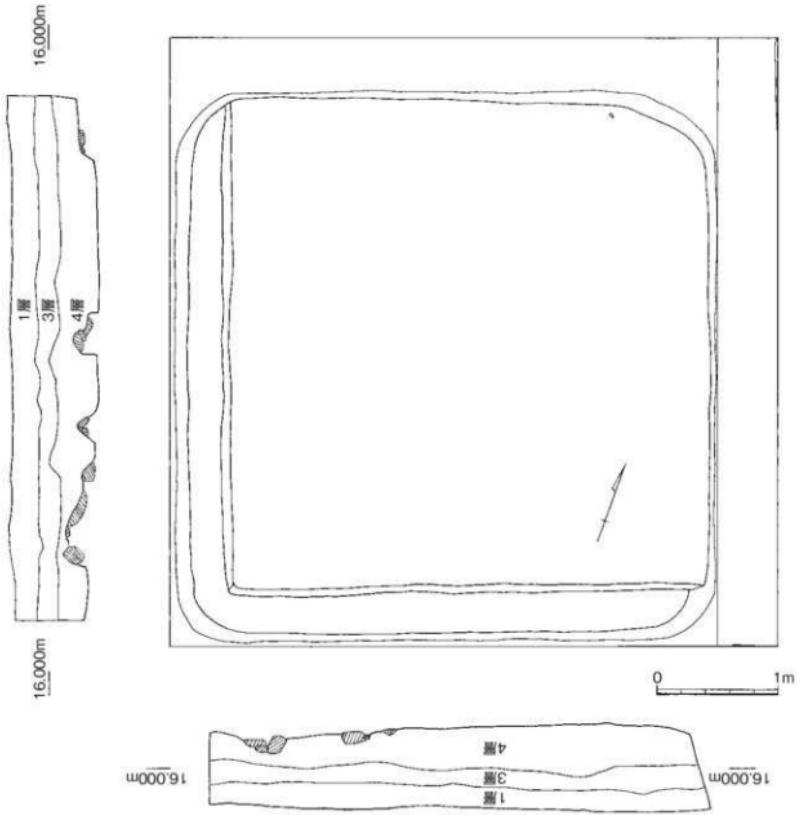


図11 1C区平面図・土層図

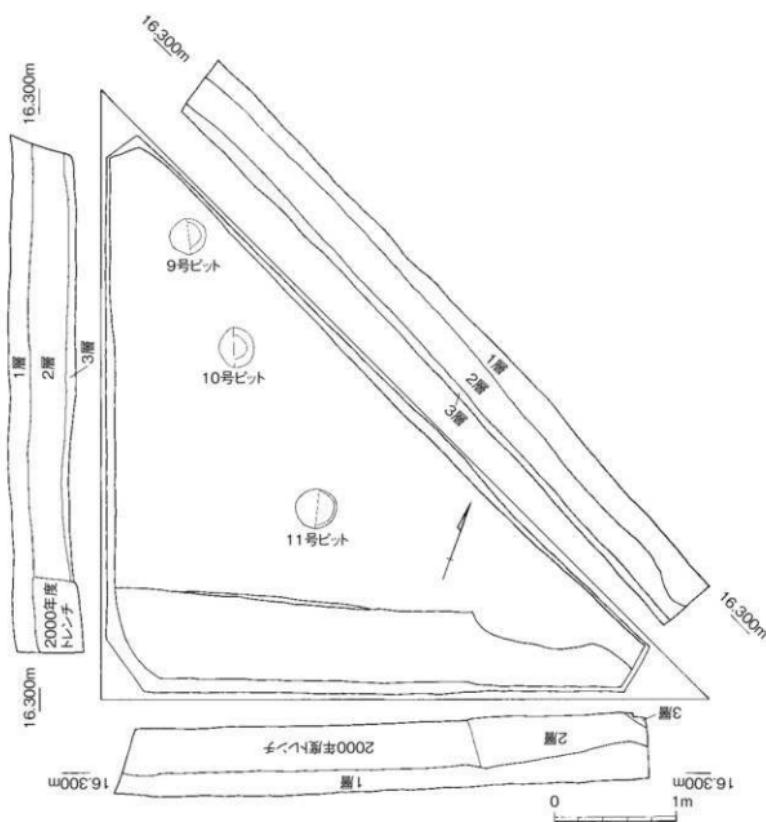


図12 2A区平面図・土層図

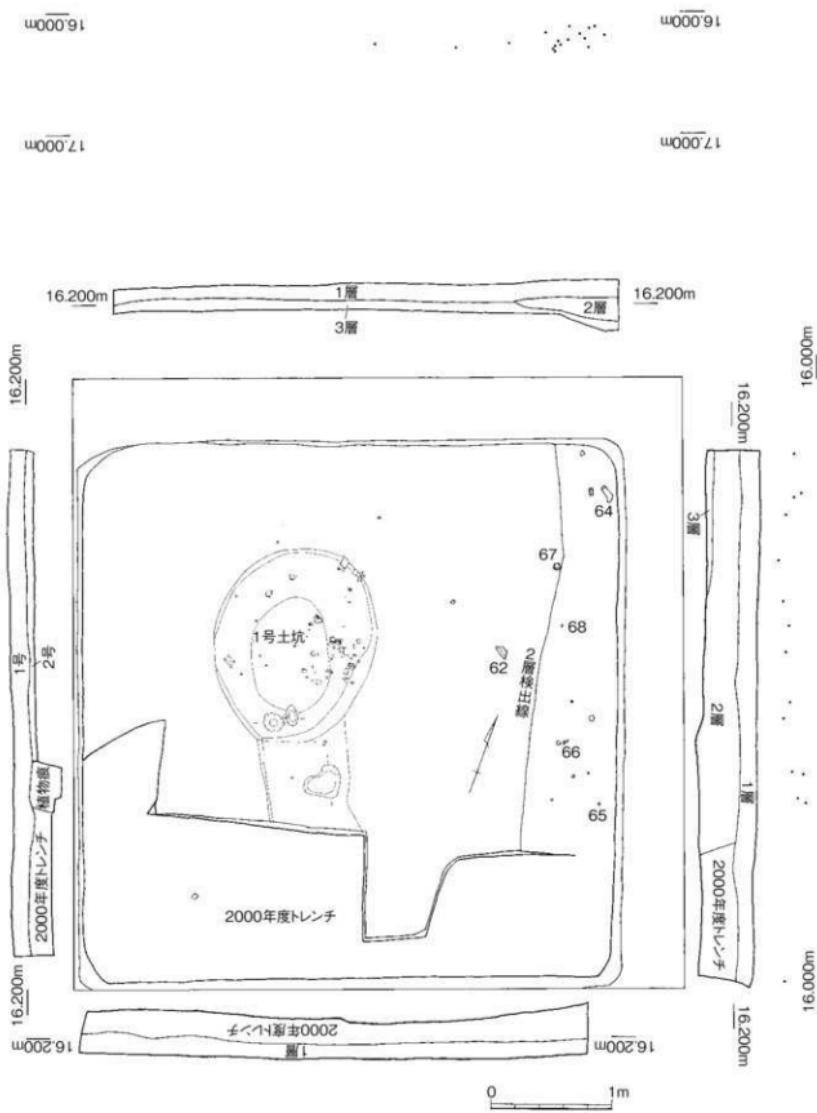


図13 2B区平面図・土層図・2層遺物出土状況

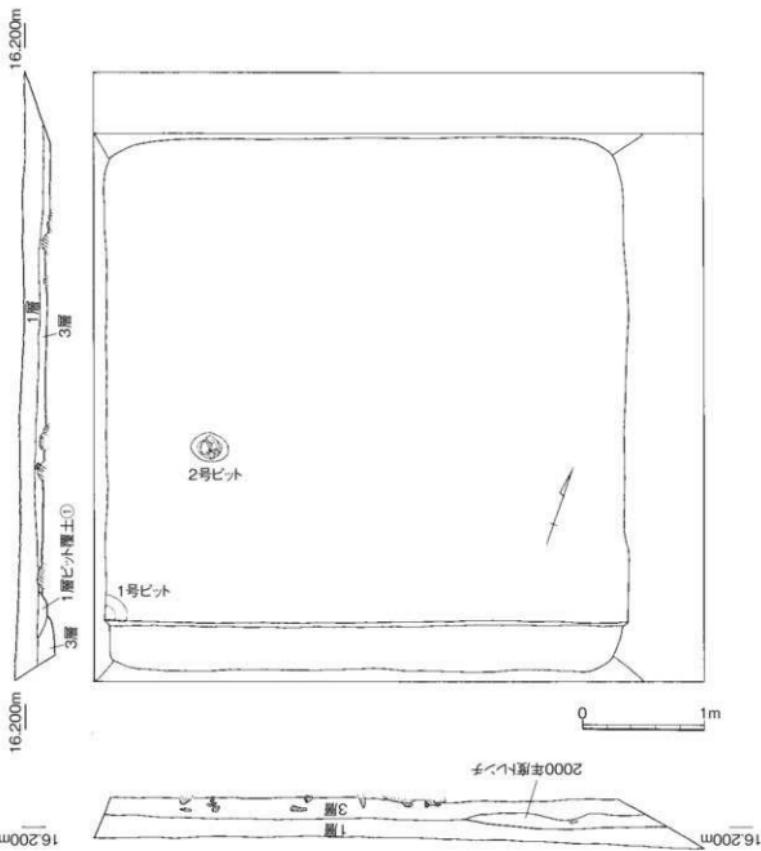


図14 2C区平面図・土層図

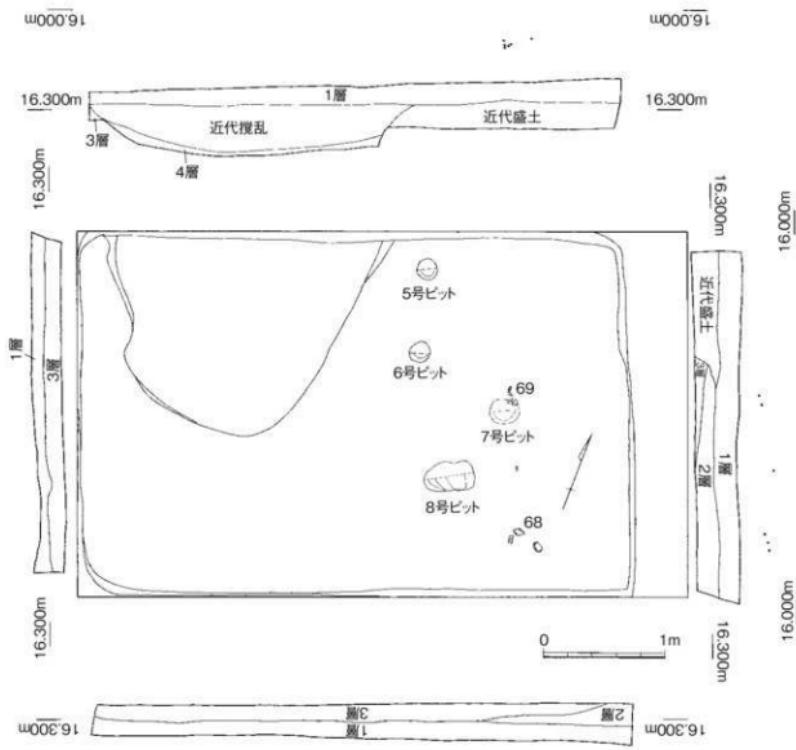


図15 3B区平面図・土層図・2層遺物出土状況

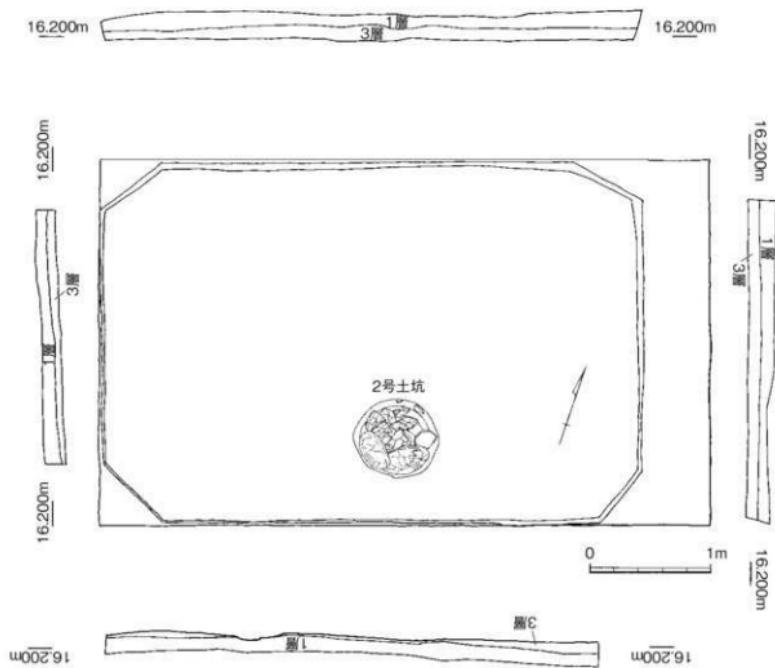


图16 3C区平面图·土层图

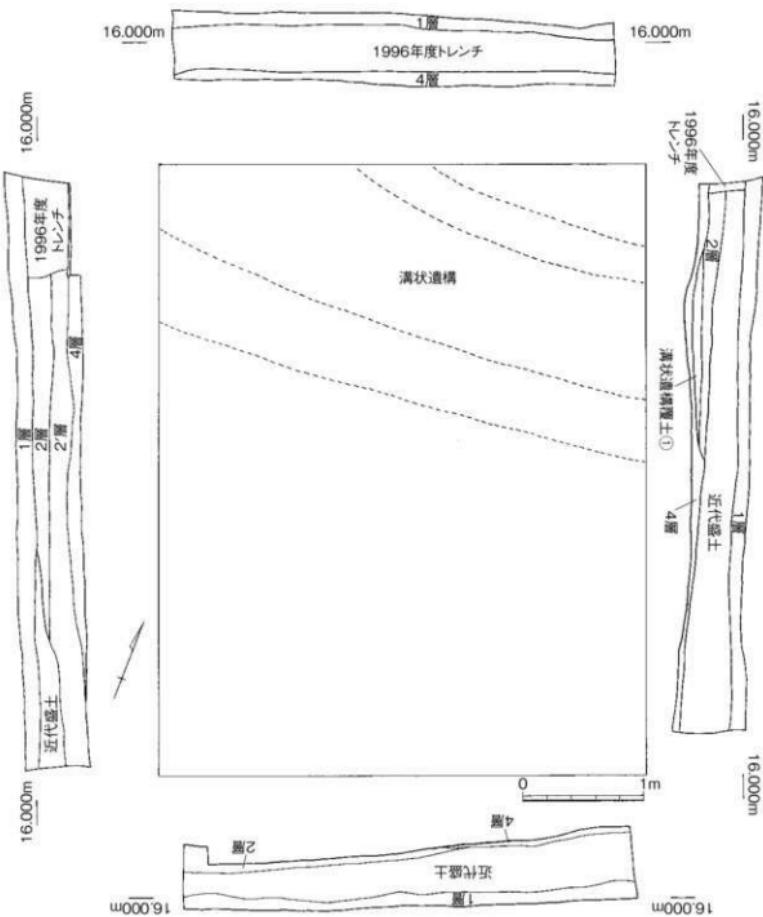


図17 4A区平面図・土層図

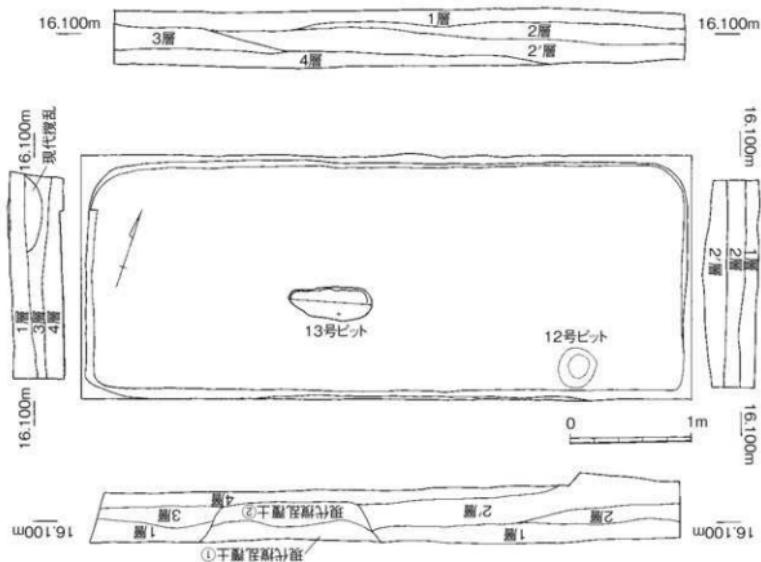


図18 4B区平面図・土層図

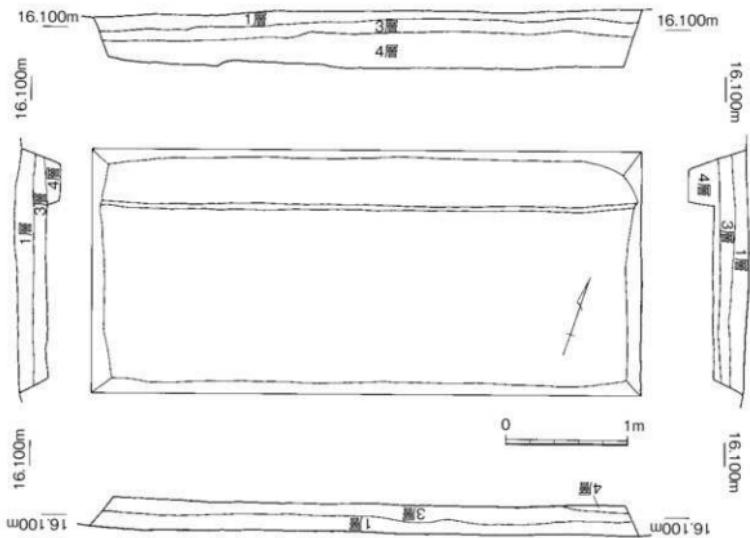


図19 4C区平面図・土層図

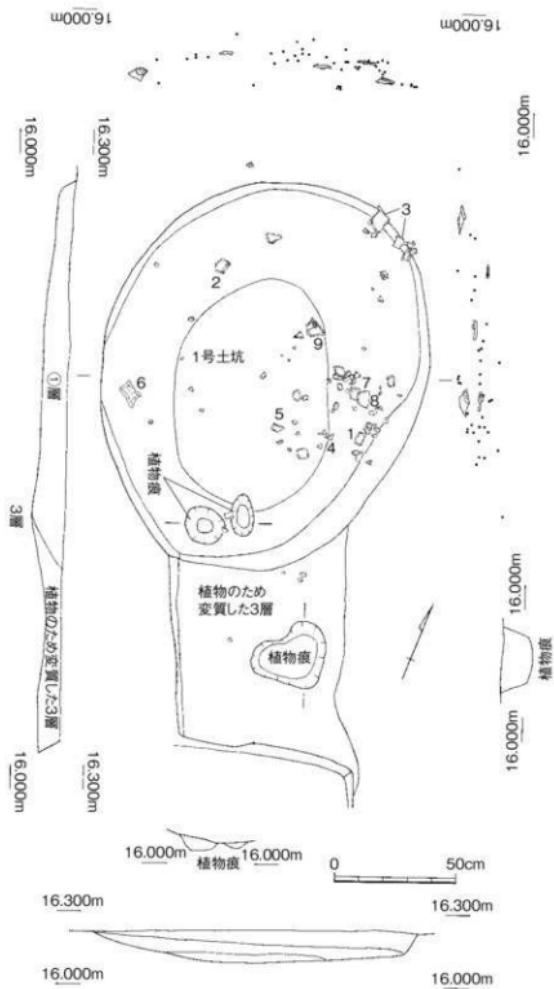


図20 1号土坑

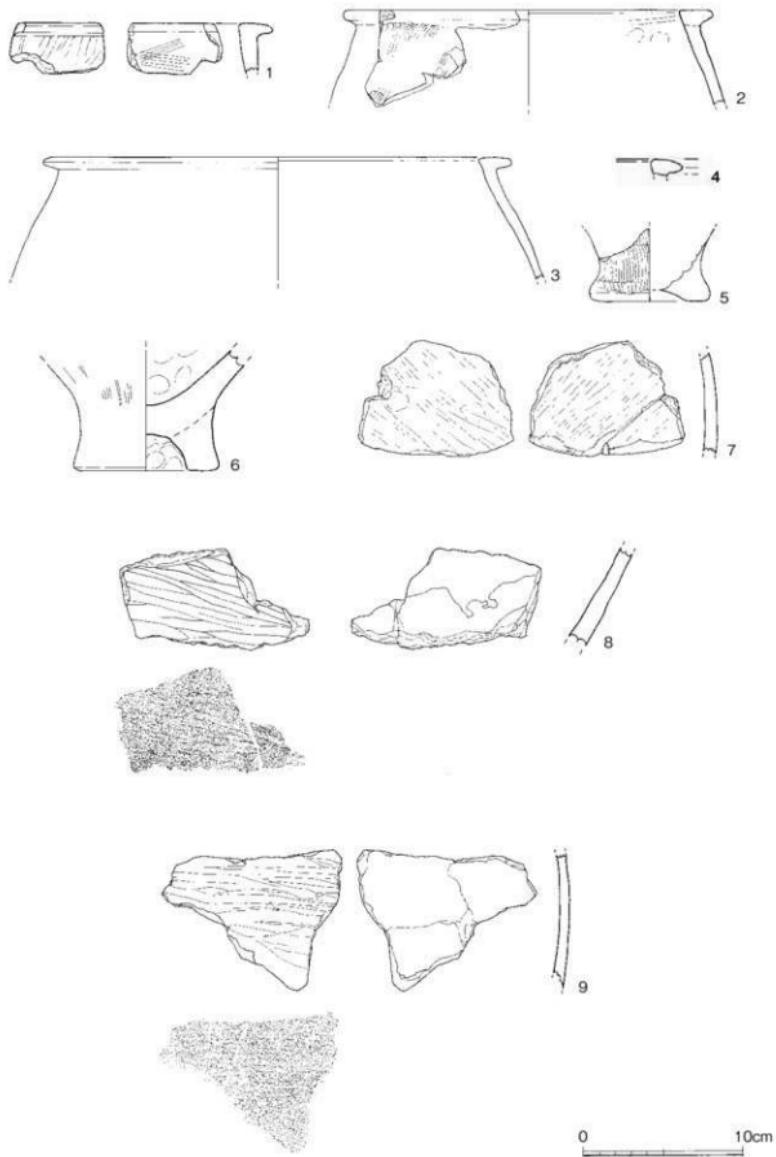


图21 1号土坑出土遗物

どが出土した。

【遺物】(図21)

1～4は城ノ越式～須玖I式の壺口縁部である。5、6は城ノ越式～須玖I式の壺底部である。5、6とも丸底を作成してから円筒状の高台をつけ粘土を充填する田崎博之のいう底部a手法(田崎1985)によって製作されている。7～9は胴部片であるが、同一個体であるものとみられる。曲率から推測すると大型の壺か樽形土器であるものとみられる。外面にはヘラナデ状のミガキがなされる。このような特徴を持つ資料は、芦辺高原地区の河川跡で須玖I式土器に伴って出土したことがあり(古澤編2017図11-1、2)、関連が想定される。胎土に金雲母が多量に混和されていることからみて奄岐島外で製作され搬入された土器である可能性がある。

【年代】

出土した土器は城ノ越式～須玖I式であるため、この時期に形成されたものと考えられる。

2号土坑(図22)

【調査】

1層除去後、3C区で検出した。完掘した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面携帯は円形で、直径64cmである。底面の標高は15.95mである。大きいもので長径40cm程度の礫が充填されている。礫は規則的に組んだものではなく、投げ込まれたような状況である。

【覆土】

覆土は①層で、暗褐色(7.5YR3/3)粘質土に明褐色(7.5YR5/8)が多量に斑に混じる。また、黒色(7.5YR1.7/1)も多量に混じる。粘性は強く、しまりは弱い。礫と礫の間には空隙が認められる部分もある。

【年代】

遺物は出土しなかったが、覆土の状況からも近代以降の構築ではないかと推定される。耕作時に邪魔な礫を処理したものであろうか。

(2) ピット

ピットは調査区全体で13基確認された。

1号ピット(図22)

【調査】

1層除去後、2C区で検出した。南側は土層確認用のサブトレーナーのため掘削されている。また西側は調査区外であるため、北東側を掘削調査した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は円形で、直径は推定で約40cmである。底面の標高は16.02mである。断面は皿状を呈している。

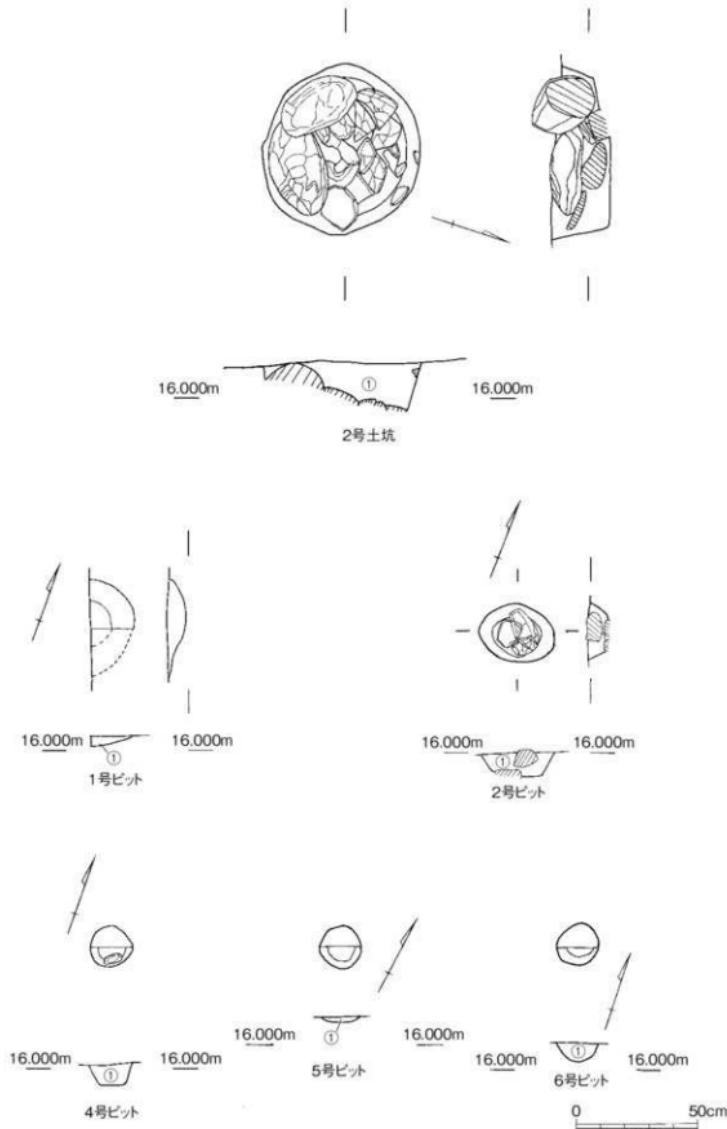


図22 2号土坑・ピット(1)

【覆土】

覆土は①層で、褐色（10YR4/4）粘質土である。にぶい黄褐色（10YR4/3）が斑に混じる。黒褐色（10YR2/2）の有機物が混じる。粘性が強く、しまりは強い。

【年代】

遺物が出土せず、時期は不明である。

2号ピット（図22）

【調査】

1層除去後、2C区で検出した。完掘した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は楕円形で、長径32cm、短径23cmである。底面の標高は15.90cmである。断面は皿状を呈している。内部に自然礫がみられ、底面にも自然礫が敷かれている。

【覆土】

覆土は①層で、褐色（10YR4/6）粘質土である。にぶい黄褐色（5YR4/4）が斑に混じる。粘性が強く、しまりは弱い。

【年代】

遺物は出土しなかったため、時期は不明である。自然礫の在り方から、2号土坑との関連を想定すると近代以降である。

3号ピット（図10）

【調査】

1B区南側サブトレーンチ断面で確認された。平面的な調査は行っていない。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面形態は不明で、底面標高は16.08mである。断面形態は皿状を呈する。

【覆土】

覆土は①層で、褐色（7.5YR4/4）粘質土である。黒色（7.5YR1.7/1）の有機物と明褐色（7.5YR5/6）の焼土が混じる。粘性は弱く、しまりは強い。

【年代】

遺物は出土せず、時期は不明である。

4号ピット（図22）

【調査】

1B区北側で2000年度調査11区トレーニチの底面で検出された。半截し、南側を掘削調査した。

【構造】

2層より下位に存在したものと考えられ、3層を掘り込んでいる。平面は円形で、直径は18cmである。底面標高は15.93mである。内部に礫1点が含まれる。

【覆土】

覆土は①層で、黒褐色（7.5YR3/2）粘質土である。粘性は強く、しまりは強い。

【年代】

遺物は出土しなかつたが、2層の堆積年代である須玖Ⅱ式期よりも前に構築されたものとみられる。

5号ピット（図22）

【調査】

1層除去後、3B区で検出された。半截し、南側を掘削調査した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は円形で、直径は17cmである。底面標高は16.09mである。断面は皿状である。

【覆土】

覆土は①層で、暗褐色（7.5YR3/3）粘質土である。褐色（7.5YR4/3）が斑に混じる。粘性は弱く、しまりは弱い。

【年代】

遺物は出土せず、時期は不明である。

6号ピット（図22）

【調査】

1層除去後、3B区で検出された。半截し、南側を掘削調査した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は円形で、直径は17cmである。底面標高は16.03mである。断面は皿状である。

【覆土】

覆土は①層で、黒褐色（7.5YR3/2）粘質土である。粘性は弱く、しまりも弱い。

【年代】

遺物は出土せず、時期は不明である。

7号ピット（図23）

【調査】

1層除去後、3B区で検出された。半截し、南側を掘削調査した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は橢円形で、長径25cm、短径20cmである。底面標高は15.89mである。断面は逆台形である。

【覆土】

覆土は①層で、黒褐色（7.5YR3/2）粘質土である。粘性は弱く、しまりも弱い。

【年代】

遺物は出土せず、時期は不明である。

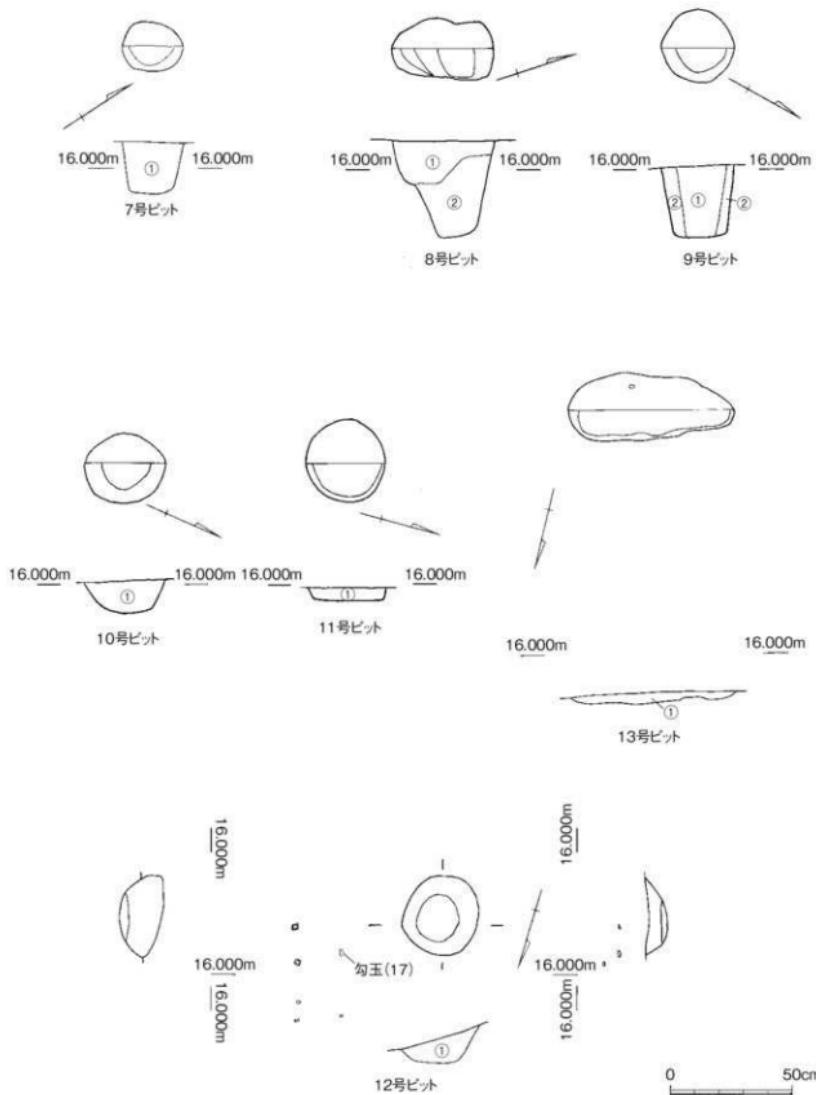


図23 ピット (2)

8号ピット（図23）

【調査】

1層除去後、3B区で検出された。半截し、南側を掘削調査した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は不整形で、長さ42cm、幅24cmである。1段テラスを持つ。

【覆土】

覆土は2層にわかれ、上層の①層は暗褐色（7.5YR3/4）粘質土である。粘性はやや強く、しまりもやや強い。下部は②層の影響かやや色暗い。下層の②層は暗褐色（7.5YR3/3）粘質土である。粘性は強く、しまりも強い。掘削後、一度堆積した後、再掘削された可能性がある。

【年代】

遺物は出土せず、時期は不明である。

9号ピット（図23）

【調査】

2A区北側で2層を除去したところ検出された。半截し、東側を掘削調査した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は円形で、直径は30cmである。底面標高は15.72mである。断面は深い台形を呈する。

【覆土】

覆土は2層に分層され、①層は暗褐色（7.5YR3/3）粘質土である。粘性は弱く、しまりも弱い。②層は褐色（7.5YR4/4）粘質土である。粘性は弱く、しまりも弱い。堆積状況からは柱穴の可能性が高く、②層堆積後、再掘削され①層が堆積したものとみられる。

【年代】

遺物は出土しなかったが、時期は2層堆積（須玖II式期）以前である。

10号ピット（図23）

【調査】

2A区北側で2層を除去したところ検出された。半截し、東側を掘削調査した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は円形で、直径は34cmである。底面標高は15.88mである。断面形状は皿状である。

【覆土】

覆土は①層で、褐色（7.5YR4/3）粘質土である。粘性は強く、しまりは弱い。

【年代】

遺物は出土しなかったが、時期は2層堆積（須玖II式段階）以前である。

11号ピット（図23）

【調査】

2A区北側で2層を除去したところ検出された。半裁し、東側を掘削調査した。

【構造】

3層を掘り込んでいる。平面は円形で、直径は32cmである。底面標高は15.94mである。断面形態は皿状である。

【覆土】

覆土は①層で、黒褐色（7.5YR3/2）粘質土である。粘性は強く、しまりは強い。

【年代】

遺物は出土しなかったが、時期は2層堆積（須玖Ⅱ式段階）以前である。

12号ピット（図23）

【調査】

4B区東側で2'層を除去したところ検出された。完掘した。

【構造】

4層を掘り込んでいる。平面は円形で、直径は30cmである。底面標高は15.63mである。断面形態は皿状である。

【覆土】

覆土は①層で、暗褐色（7.5YR3/3）粘質土である。粘性は強く、しまりは弱い。

【時期】

遺物は出土しなかったが、時期は2'層堆積以前である。

13号ピット（図23）

【調査】

4B区中央で2'層を除去したところ検出された。半裁し、北側を掘削調査した。

【構造】

4層を掘り込んでいる。平面は不定形で、長さ35cm、幅14cmである。底面標高は15.89mである。断面形態は皿状である。

【覆土】

覆土は①層で、暗褐色（7.5YR3/3）粘質土である。

【年代】

遺物は出土しなかったが、時期は2'層堆積以前である。

(3) 溝状遺構（図24）

【調査】

2層除去後、1A区西側、1B区東側、4A区で確認した。完掘した。1A区で東側の掘り方は確認されたが、西側の掘り方は1996年度調査E区（旧トレンチ）を再掘削し、確認した。

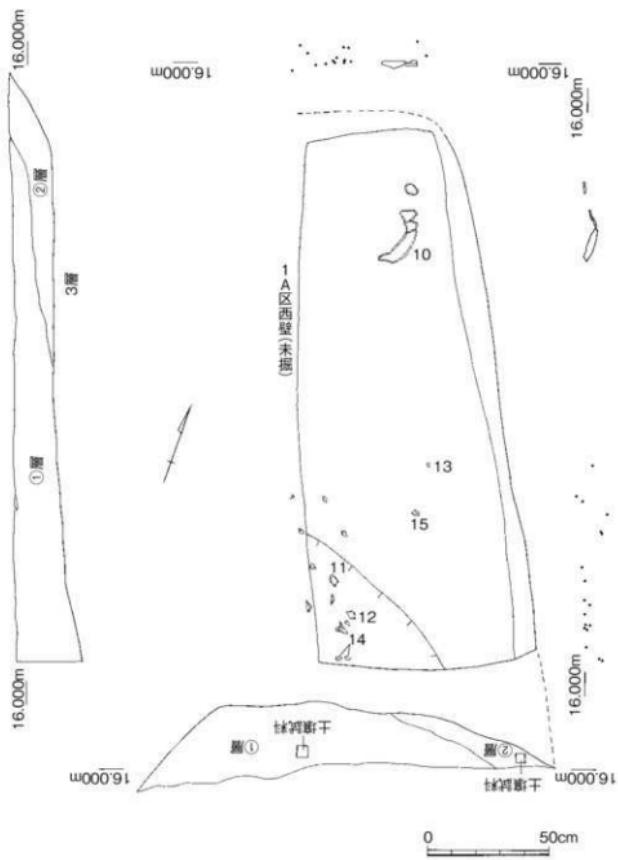


图24 溝状遺構（1A区）

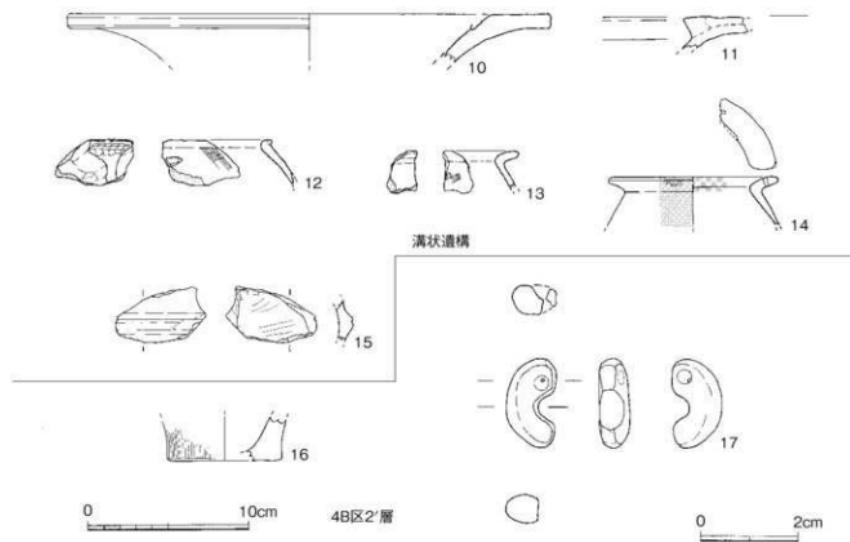


图25 满状遗構出土遗物·4B区2'层出土遗物



図26 1A区2層遺物出土状況(1)

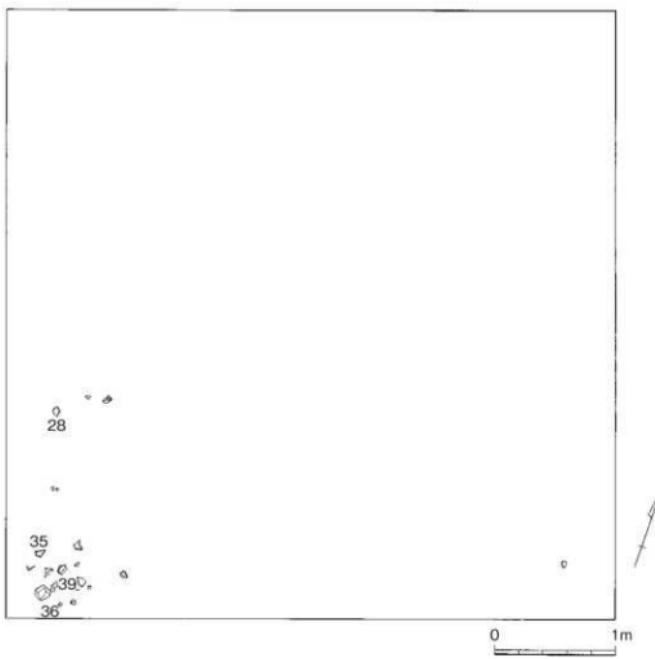


図27 1A区2層遺物出土状況(2)(遺物の垂直分布は図26に統合)

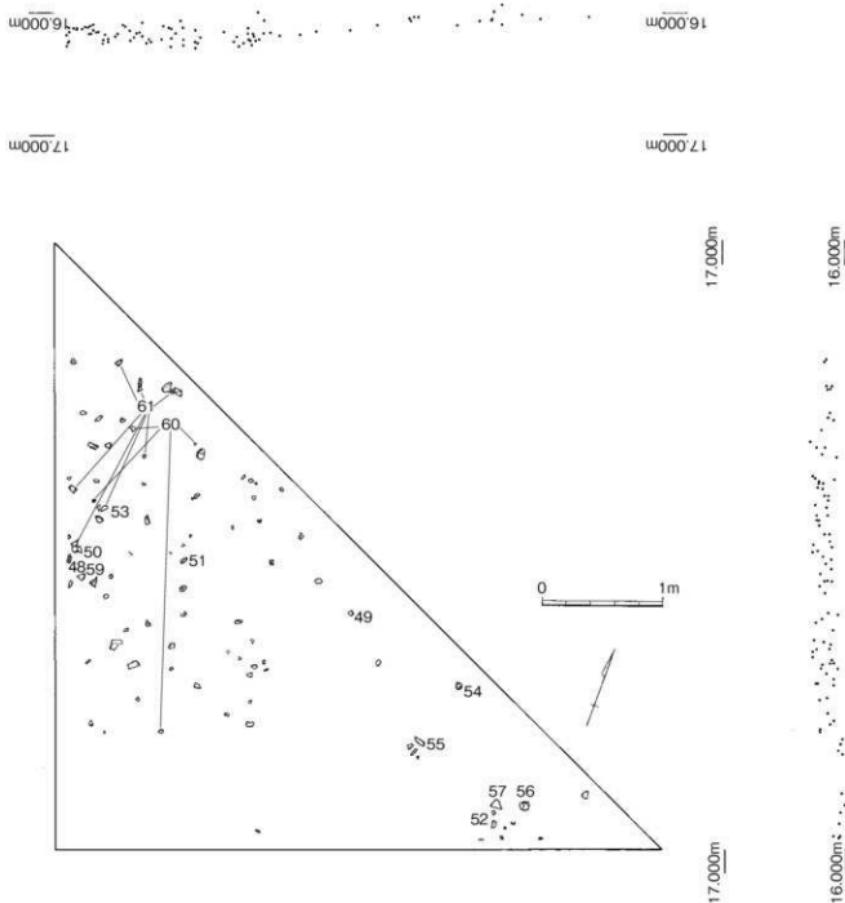


图28 2 A 区 2 层遗物出土状况



图29 4 A 区 2 层遗物出土状况

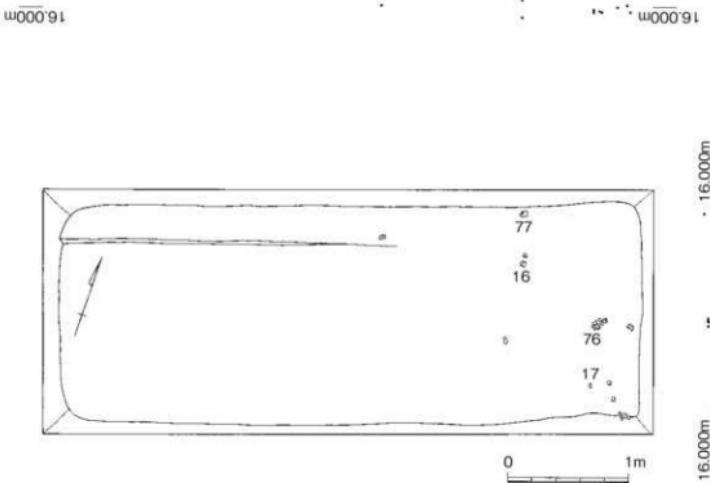


図30 4B区2層・2'層遺物出土状況

・ 2B区（図33）

62～64は須玖I式の壺口縁部である。65は須玖I式の壺口縁部である。66は胴部突帯である。67は丹塗り高坏の口縁部である。

・ 3B区（図33）

68は弥生時代中期の壺口縁部である。69は把手で、断面は円形である。接合部で剥離しており、接合面から推定すると、曲面を示す胴部に付着していたようである。

・ 4A区（図33）

70、73は弥生時代中期の壺口縁部である。71は弥生時代中期の壺口縁部である。72は須玖II式の壺口縁部である。74は須玖II式の壺胴部である。75は丹塗りで暗文の施される須玖II式の壺肩部である。

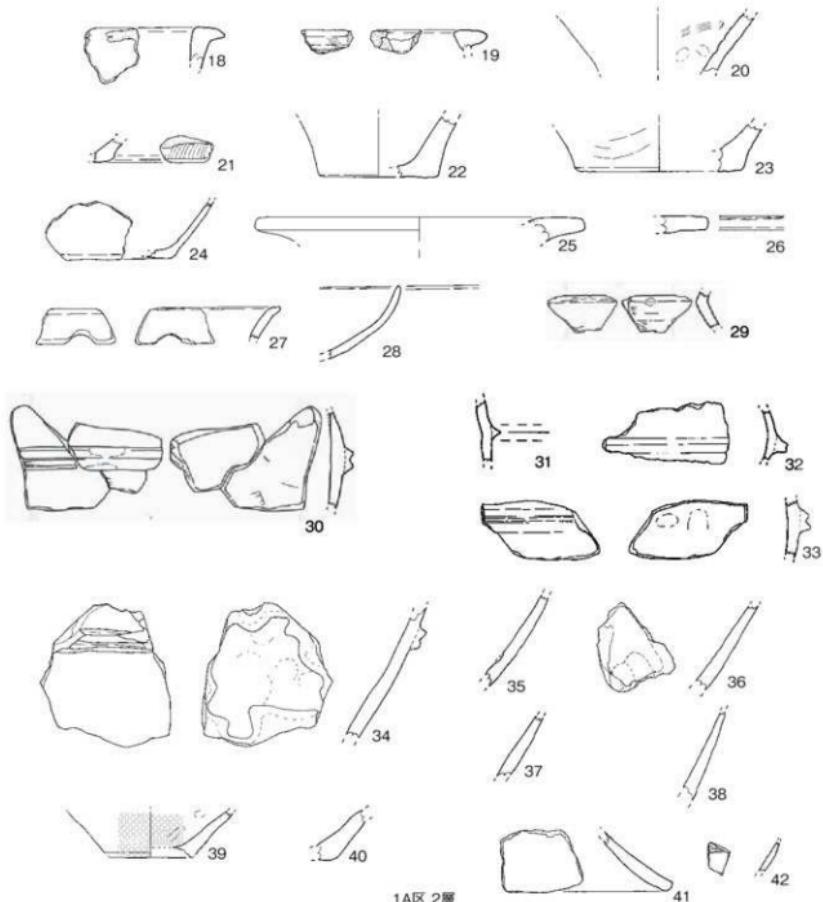


図31 1A区・1B区2層出土遺物

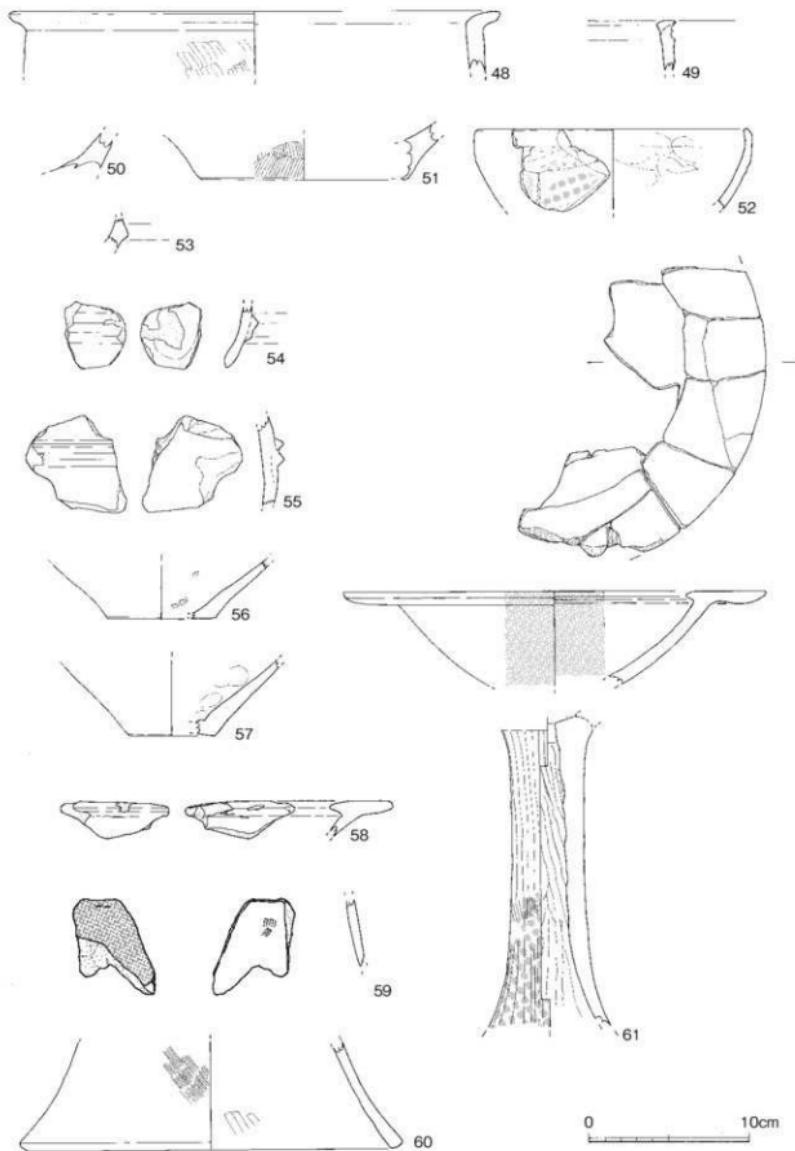


图32 2A区2层出土遗物

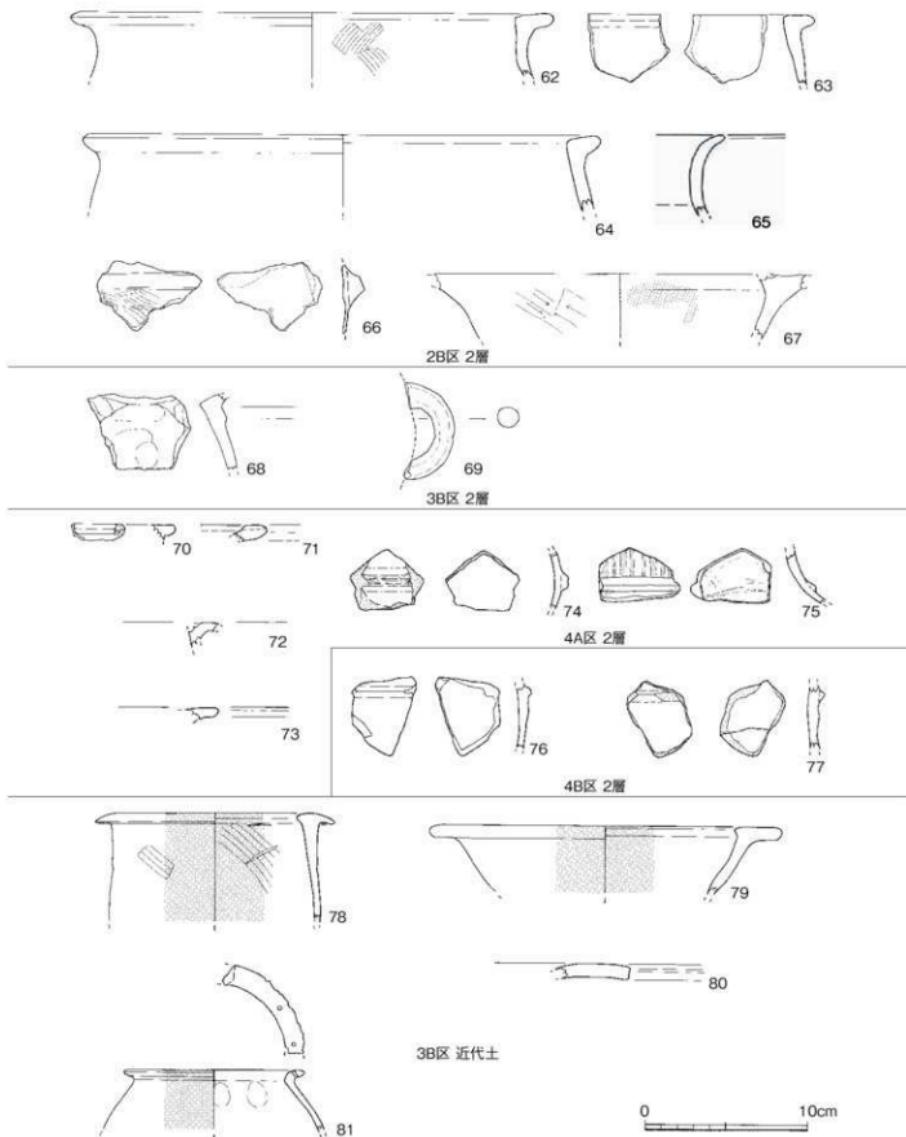


图33 2B区·3B区·4A区·4B区2层、3B区近代土层出土物

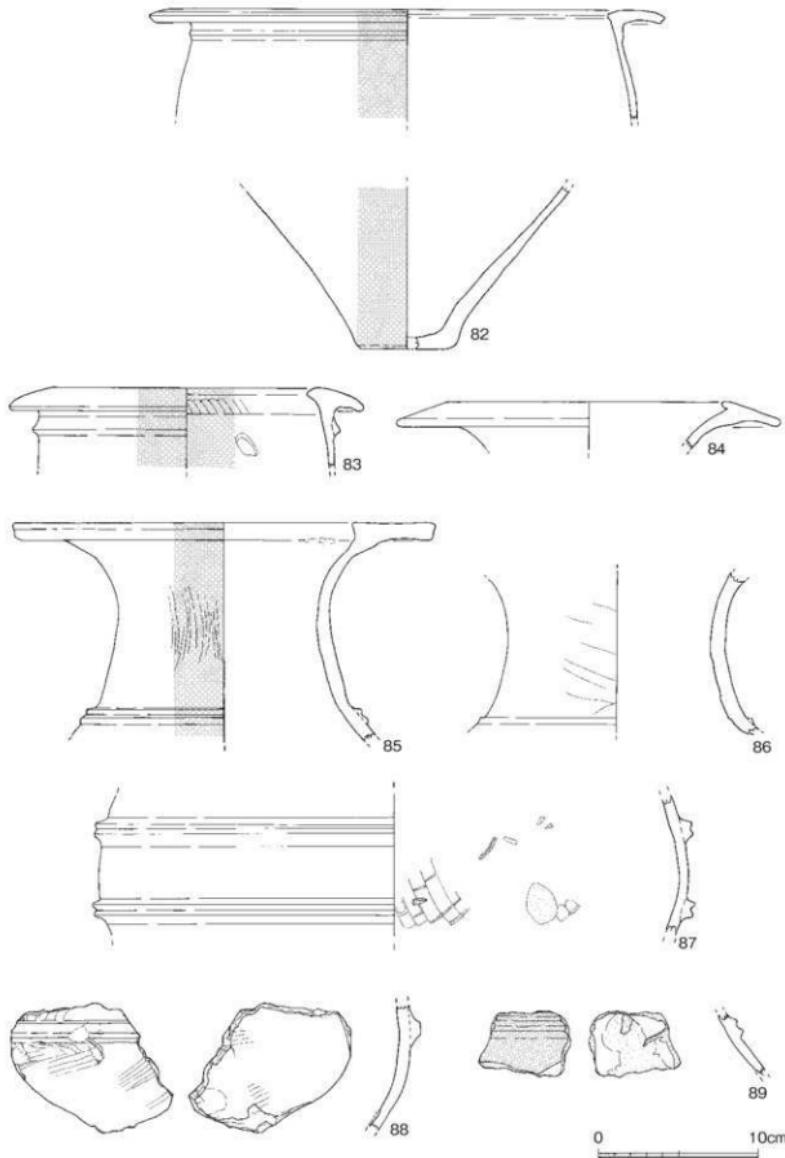
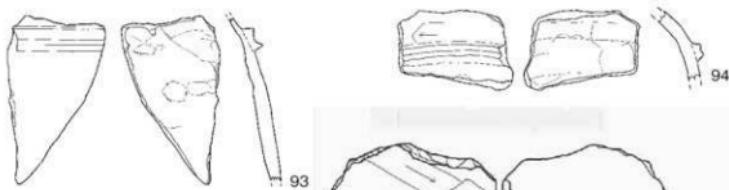
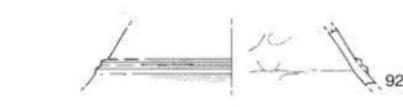
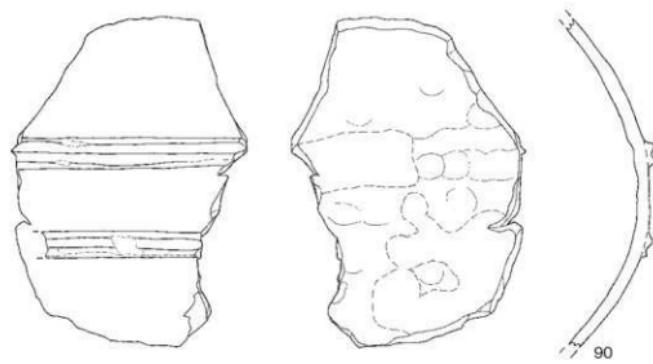


图34 4B区搅乱出土遗物 (1)



0 10cm

图35 4B区扰乱出土遗物 (2)

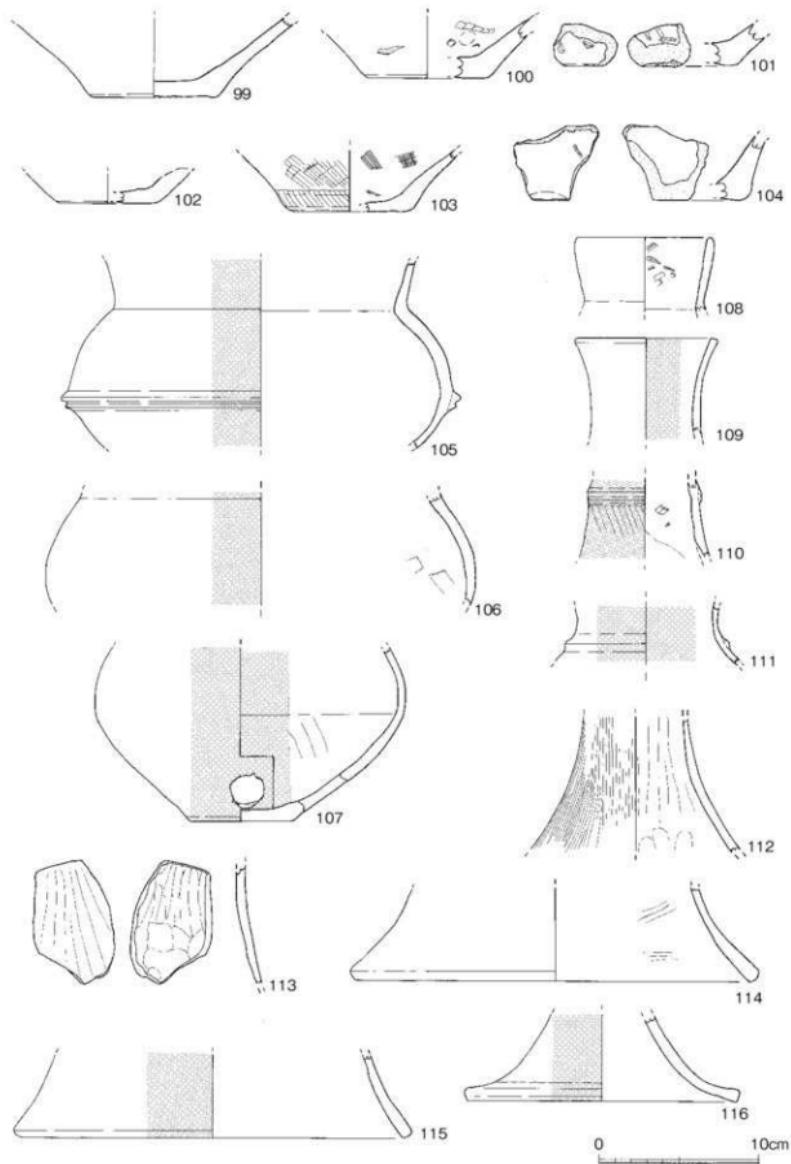


图36 4B区扰乱出土遗物 (3)

Ⅱ式にはば限定され、土器の遺存状況も良好である。そのため土坑などの遺構に伴う一括遺物の可能性が高い。そして、丹塗り土器の比率が高く、丹塗り土器の組成として壺、壺、高杯と器種組成が比較的良く揃っている。そのため祭祀土坑などが調査区南側に存在した可能性を指摘しうる。

田崎博之1985「須玖式土器の再検討」「史淵」122

古澤義久編2017『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第20集

109	4.B.(K)	角膜倒置 角膜倒置	倒 倒	1.1H	6.8 相	7.3Y386.6	明滅鏡	10Y375.6	角石-石英	ナガリ ナガリ	明滅鏡 ナガリ
110	4.B.(K)	角膜倒置 角膜倒置	倒 倒	1.1H	6.8 相	5Y386.6	相	5Y386.6	角石-石英	ナガリ ナガリ	ナガリ
111	4.B.(K)	角膜倒置 角膜倒置	倒 倒	1.1H	6.8 相	5Y386.6	相	5Y386.6	角石-石英	ナガリ ナガリ	ナガリ
112	4.B.(K)	角膜倒置 角膜倒置	倒 倒	1.1H	6.8 相	7.3Y386.6	相	7.3Y386.6	角石-石英	ナガリ ナガリ	ナガリ
113	4.B.(K)	角膜倒置 角膜倒置	倒 倒	1.1H	6.8 相	10Y386.6	明滅鏡	5Y386.6	角石-石英	ナガリ ナガリ	明滅鏡 ナガリ
114	4.B.(K)	角膜倒置 角膜倒置	倒 倒	1.1H	6.8 相	5Y386.6	明滅鏡	7.3Y386.6	角石-石英	ナガリ ナガリ	明滅鏡 ナガリ
115	4.B.(K)	角膜倒置 角膜倒置	倒 倒	1.1H	6.8 相	5Y386.5.8	相	7.3Y386.6	角石-石英	ナガリ ナガリ	相
116	4.B.(K)	角膜倒置 角膜倒置	倒 倒	1.1H	6.8 相	7.3Y387.6	相	7.3Y386.5.6	角石-石英-金雲母	ナガリ ナガリ	相

7. 出土石器（図37、表3）

原ノ久保C地区は原の辻遺跡南側丘陵にあたり、過去の調査で旧石器時代の遺物が多数出土している地区の一つである（註1）。今回の調査においても表土や搅乱層が中心ではあるが、ナイフ形石器などが出土している。また、加工痕のある剥片や石材の形状と産地が推測できる剥片、石鎌、石剣や石斧の残欠などが出土している。

117・118は切出形のナイフ形石器である。117はおもて面からのみの基部調整が施され、左側背面は直線的に細調整されている。刃部は欠損していると思われる。118も同じくおもて面からの調整を中心に基部加工が施され、右側背面は直線的に調整されている。厚みのある剥片を素材としているため重厚感があり、117と同様に刃部は欠損している。117・118ともに狸谷型ナイフ形石器（註2）としてとらえられる。119はおもて面からの基部調整と、右側縁に部分的な再調整が行われているナイフを原型とする石器と考えられるが、刃部の幅が広く、刃毀れの再加工などの刃部の再調整の痕跡が見られる。スケイバーとしての転用品の可能性が考えられる。120は継長剥片で、両側縁に刃毀れ等の痕跡が残る。121は継長の石刃であり、細かい連続した刃潰し調整が施され、両側に直線的な側縁を形成している。122は表皮の残る継長の剥片で、両側縁に粗い加工痕を残す。原石は拳大程度の円礫と思われる。123も同じく表皮が残る厚手の剥片であり、おもて面に数回にわたり表皮を剥ぎ取った痕跡を残している。原石は円礫で、表皮には爪形の傷があることから松浦牟田産の可能性が高い。124は湾曲する継長の剥片で、上部に打面調整の痕跡と左側縁に部分的な刃潰しの調整痕が残る。石材は不純物の混入が多く、風化によるものなのか黄褐色の斑紋が多数見られ、剥離面はほとんど観察できない。125は青灰色の拳大ほどの円礫を母岩とする残核である。表皮にはあばた状のくぼみがみられ、比較的表面に凹凸が少ない特徴である。126は径が7～8cm程度の円礫を原石とする表皮を残す剥片である。石材は黒曜石だが縞状の斑紋が見られる。127は同じく円礫を原石とする表皮を残す剥片であり、石材は透明度の高い漆黒色の黒曜石である。表皮には爪状の傷跡が見られることから、松浦牟田産の可能性が高い。

128は石鎌である。表裏面ともに一次剥離面を一部残すものの、非常に丁寧な調整が全面に見られる。両側縁は丸く張り出した形状で、基部の抉りは浅く小さいため脚が短く幅広となっている。また、左側脚部は一部欠損しその後に再調整が行われたと思われる。石材は不純物を多く含む漆黒色の黒曜石である。石鎌としては比較的大型ではあるが、器面調整が丁寧で基部の抉りも明確であり、縄文時代の様相が強い。内陸部という立地的な環境もあるが、原の辻遺跡では縄文土器の量に比べ石鎌の出土が圧倒的に多いため、系譜を残しながらも弥生時代まで使われ続けた石鎌の可能性も捨て難い。

129は磨製石剣の先端部と考えられる。石材は砂岩で、おもて面の中央には自然面を残し、両側縁と切先部のみ研ぎ上げている。うら面は風化が顕著で鏽の判断がし難いが、おもて面同様、側縁部と切先部のみ研ぎ上げている痕跡がかすかに残る。切先部から刀身部にかけてはやや彫込みがあるもののほぼ直線的であり、鉄剣形（註3）が想定されるが、鏽が無いことと、これまでの原の辻遺跡からの出土例から考えると、茎の抉りが非常に小さく、短い形状の石剣と推測できる。

130は方柱状片刃石斧の先端部を残す残欠である。石材は乳白色の頁岩で節理が観察される。全体的に摩滅しており、磨きの方向はほとんど観察できない。幅と厚さはほぼ等しく、断面は隅丸方形の形状で均整のとれた形状である。刃部裏面は大きく欠落しているが、研ぎ直しにより痕跡が不明瞭と

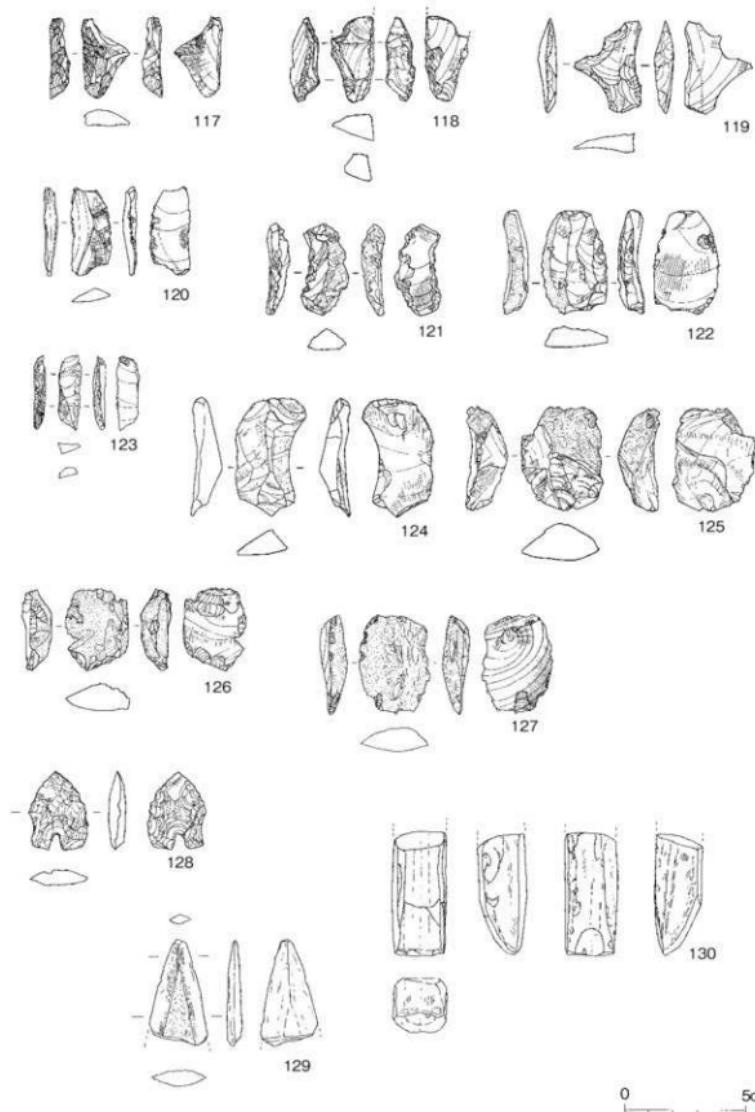


図37 出土石器図 (1/2)

8. 出土中世～近代遺物

(1) 陶磁器 (図38、図39)

- ・3B区近代攪乱及び近・現代盛土

131は唐津焼系の陶器碗である。132～134は近世肥前系磁器碗口縁部である。135は酸化コバルトを絵具とした型紙摺絵技法による近代印判手である。136は近世肥前系磁器である。

- ・4A区近代盛土

138は近世肥前系磁器である。137は現代磁器皿である。

- ・表土

139は白磁碗IV類（山本2000）で、11世紀後半～12世紀前半の所産である。140、141は朝鮮時代磁器である。

142と143は陶製擂鉢である。同一個体の可能性がある。家田淳一の編年案（家田2000）のV期（18世紀後半～19世紀）の所産であるとみられる。144～146は近世青磁である。

147～156は近世肥前染付磁器である。148の類例は、永尾本登窯跡（宮崎編1993）、三股新登窯跡（中野2004）、大新登窯跡（中野2006）などで確認されており、波佐見の製品であるとみられる。1820年代～1860年代の所産であると考えられている（中野2000）。150～156は同様の図案の磁器碗片であるとみられる。外面には2条を1組にして格子文が描かれ、横位の線は輻轆の回転を利用して描かれる一方、縦位の線は手書きにより描かれる。内面は口縁部に2条、胴下部には1条の横線がめぐる。見込みには数条の交差する文様が描かれ、釉剥の跡がみられる。このような染付磁器碗の類例は中尾上登窯跡（宮崎編1993、中野2008）、永尾本登窯跡（宮崎編1993）、三股新登窯跡（宮崎編1993、中野2004）、大新登窯跡（中野2006）などで確認されており、波佐見の製品であるとみられる。1820年代～1860年代の所産であると考えられている（中野2000）。なお、この図案の磁器碗は壱岐島では浦海遺跡で採集されたことがある（古澤2019）。

157～171は近代磁器である。157～168の絵具は酸化コバルトで、鮮明な藍色に発色する。施文技法は157、158、166、168は手書き、159～165は型紙摺絵、167はゴム印による。169と170の絵具は酸化クロムであるとみられ緑色に発色する。施文技法は銅版転写である。印判手の変遷過程についてはおおむね型紙摺絵から銅版転写に変遷したことが認められているが、型紙摺絵については昭和前期まで存続したということも指摘されている（山下2014）。型紙摺絵は肥前志田焼において明治4（1871）年頃再興され、波佐見では明治6（1873）年に以降、底部では明治11（1878）年以降、美濃では明治15（1882）年頃以降開始された。銅版転写は肥前では明治19（1886）年頃、開始されたとする。その後20世紀に入ってゴム印転写が登場するという（仲野1996）。また、絵具から変遷をみると酸化コバルトが明治元（1868）年に日本にもたらされ、有田では明治4、5（1871、2）年頃から普及し、明治7（1874）年瀬戸に伝えられたとされる。そして色調としては明治前・中期には鮮明な発色が好まれ、明治後期以降にはやや落ち着いた人造呉須が用いられるようになるが、日常雑器においては大正期まで鮮明な色調が続く場合がある。酸化クロムの普及年代も酸化コバルトと同様であったものとみられている（鈴田1983）。以上の年代観から、鮮明な発色の型紙摺絵による159～165は1870年代から大正期頃、銅版転写による169、170は1880年代から昭和前期、ゴム印による167は20世紀前半という年代を付与することができる。

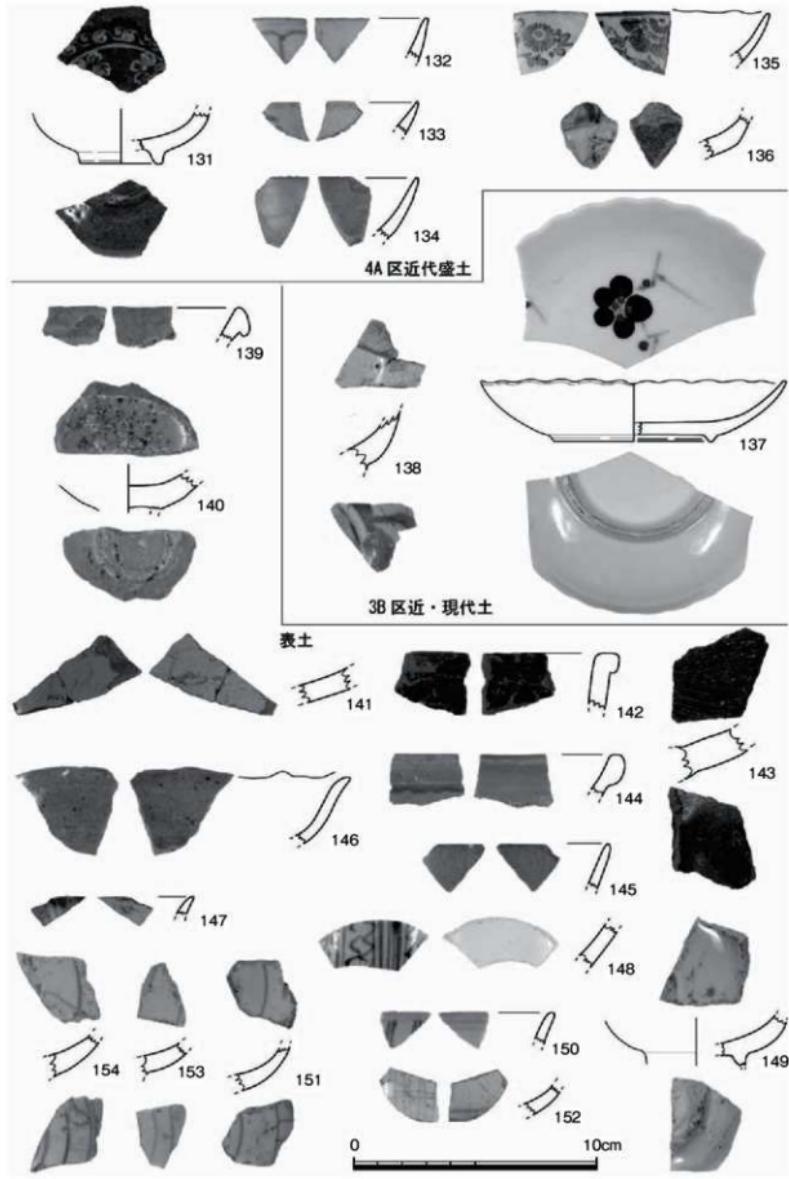


图38 出土陶磁器 (1)

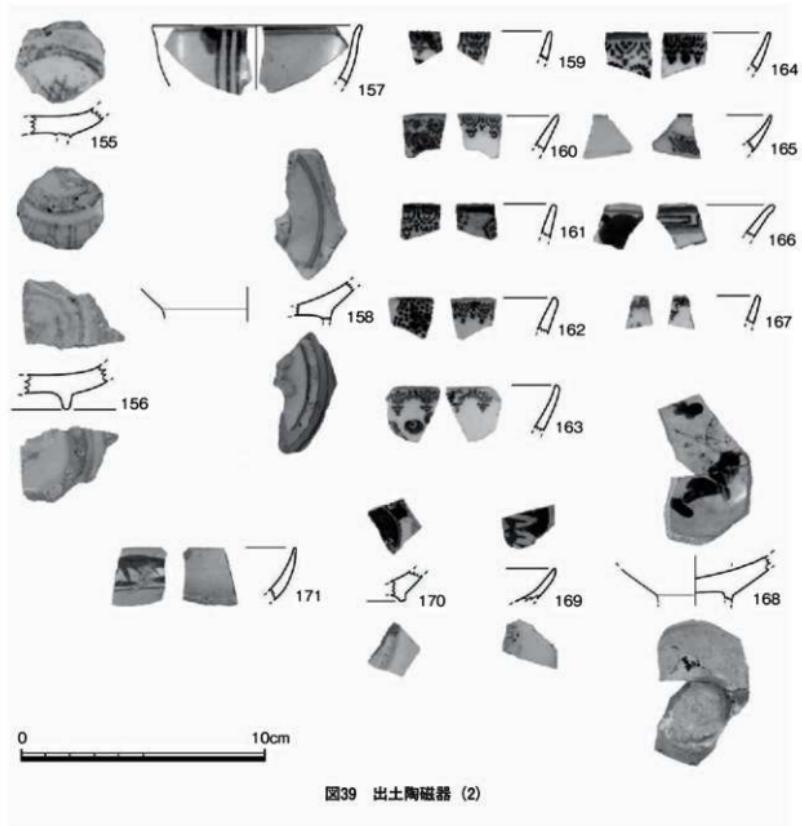


図39 出土陶磁器 (2)



図40 出土近代銭幣

171は朱色の顔料により上絵付けで手書き施文される。

(2) 銭幣（図40）

172は二銭青銅貨である。1C区表土から出土した。直径31.89mm、厚さ2.38mm、重さ12.944gである。正面は「二銭」「五十枚」「換一圓」、背面は「大日本・明治六年・2SEN」とあり、明治6（1873）年発行であることがわかる。173は一円黄銅貨である。1C区表土から出土した。直径19.88mm、厚さ1.45mm、重さ2.314gである。腐蝕が甚だしく銭種の判別は困難であったが、蛍光X線分析の結果、銅と亜鉛が検出され、黄銅貨であることが判明した。日本の黄銅貨のうち近似した寸法の銭種としては昭和23（1948）～25（1950）年発行の一円黄銅貨が挙げられる。そのような観点からみると、背面の「1 YEN」を取り囲む円周や側面の刻印も確認でき、一円黄銅貨に特定できる。

これら的小額貨幣は「小額通貨の整理及び支払金の端数計算に関する法律」（昭和28年法律第60号）により、昭和28（1953）年12月31日を以って、その通用が禁止された（引換期間は昭和29年1月4日～6月30日）。特に、一円黄銅貨は、第二次世界大戦終戦直後のインフレーションにより金属価値が額面を大きく上回ったため廃貨に至ったという経緯がある。そのため昭和23年の初鋳から、わずか6年程度しか市中には流通せず、考古学的には短い期間流通したものであると言え、特殊な事情を考えない限り、第二次世界大戦終戦直後の土地の利用を示すものであると評価される。

- 家田淳一2000「陶器の編年2・擂鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会
鈴田由紀夫1983「近代陶磁の年代考証について—絵具の変遷を中心として—」「近代の九州陶磁展」佐賀県立九州陶磁文化館
鈴田由紀夫1985「近代における有田陶業技術の変遷」「技術と文明」2-1
仲野泰祐1996「近代の絵付—型紙、銅版絵付」「印判手の意匠　近代の絵付け＝型紙摺絵・銅版転写の世界」町田市立博物館図録第103集
中野雄二2000「波佐見」「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会
中野雄二2004「三股新登窯跡」波佐見町文化財調査報告書第16集
中野雄二2006「大新登窯跡」波佐見町文化財調査報告書第17集
中野雄二2008「中尾上登窯跡」波佐見町文化財調査報告書第18集
古澤義久2019「壱岐市勝本町浦海遺跡探集遺物」「島の科学」56
宮崎貴夫編1993「波佐見町内古窯跡群調査報告書」波佐見町文化財調査報告書第4集
山下峰司2014「近代美濃焼の『銅版・本銅版』—明治・大正・昭和のやきもの相場—」「公益財団法人瀬戸市文化振興財团埋蔵文化財センター研究紀要」18
山本信夫2000「太宰府条坊跡X V—陶磁器分類編ー」太宰府市の文化財第49集

IV 総括

1. 弥生時代遺構・包含層の性格

今次調査区では1996年調査E区（安楽・西1999）と2000年度調査11区（安楽2001）として調査された履歴がある。そのため、過去の調査によって検出された遺構について述べた後、今次調査区の遺構について整理する。

(1) 今次調査区でこれまでに確認された遺構

1996年調査E区では内部から須玖II式土器が出土した1号溝、須玖II式の長頸壺の埋納跡が発見されている。このうち1号溝は今次調査区の溝状遺構に繋がる遺構である。

2000年度調査11区では須玖II式の壺2点を合口式に利用した小児葬棺墓1基が確認された（図41）。これらの遺構配置と今次調査の遺構配置の平面的位置関係については図8に示したとおりである。

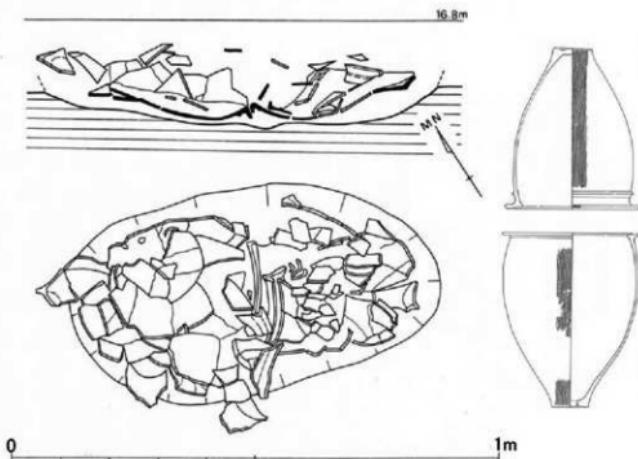


図41 2000年度調査区小児葬棺

(2) 1号土坑

2B区で確認された1号土坑は弥生時代中期初頭から中期中葉にかけて構築された遺構である。周辺での同時期の遺構がどれほどあったかは不分明であるが、最大で見積もっても2A区と4B区のピット群と溝状遺構程度であり、これまでのところ住居址などの遺構は周辺で伴わない。また、ほかの土坑があるわけではなく群をなしておらず、単独で営まれた土坑であるように思われる。

土坑の機能・用途については、壺が最少で4個体出土しており、このほか大型の壺があるようだが、全て破片で出土しており、小児葬棺を含む墓地ではない。祭祀土坑の可能性はあり、ミガキ調整のなされた大型壺の破片などはこのことを示しているように思われる。丹塗り土器は出土していないが、城ノ越式期～須玖I式古段階では原の辻遺跡全体で丹塗り土器があまり出土していない。

周辺の遺構との関係でみると、現況では独立性が強いように思われるが、調査区西側では本来あったと想定される弥生時代包含層も削平を受けていることから、遺構が現認できないという可能性もあり、単純な廃棄土坑の可能性も排除することはできない。2層等の弥生時代包含層には城ノ越式期～須玖Ⅰ式土器も含まれていることから、周辺で土地利用があったことは間違いないが、1号土坑もこれとの有機的な関係を考えておく必要がある。

(3) ピット群

今次の調査で確認された13基のピットのうち、確実に弥生時代の所産であるものは2層より下位で検出された4号ピット、9号～11号ピット、2'層より下位で検出された12号ピット、13号ピットである。

このうち9号～11号ピットは直線に配置され相互に関連を持つ遺構である可能性が高い。配置間隔は9号ピット～10号ピットが約50cm、10号ピット～11号ピットが約80cmである。このピット列の西側に対応するピット列は確認されなかった。また、東側は調査区外であるが、現況で土地が急激に落ち込んでいる。東側にピット列がある場合は掘立柱建物の可能性があるが、柱列であった可能性もある。

(4) 溝状遺構

床面から須玖Ⅰ式の高坏口縁部（10）が比較的の遺存状況が良好な状態で出土している。覆土からは須玖Ⅱ式を中心とする土器の細片が出土している。2層より下位で検出されたので須玖Ⅱ式期かそれ以前に形成されたことは明らかで、覆土出土状況から須玖Ⅱ式期に埋没しており上限年代は明確である。構築された時期（上限年代）については、床面出土の須玖Ⅰ式土器を積極に解せば、その時期になるが、明確ではない。この溝状遺構は標高が低い東側から、伸びてきて途中で北方に進路を変え、1A区で立ち上がりが確認されるように収束する。土地の稜線に沿う形ではなく調査区中央を目指して突っ切るように伸びている。1A区の収束部のその先には須玖Ⅱ式土器を用いた小児葬墓が認められる。遺物の出土状況としては、床面からは先述の高坏口縁部以外に遺存状況が良好な状態での遺物出土はなく、多くは覆土からの埋没過程に伴うものである。そのため、溝内に積極的に土器を多量の土器を投棄したという状況はみられない。1996年調査E区で、この溝状遺構が検出されたときは、溝内より丹塗り土器が出土したことをもって、祭祀に用いられたとし、E区附近にさらに墓域があり、その区画溝ではなかったかと推測されていたが（安楽・西1999）、今次の調査結果を踏まえると、成人用の墓地はなかったようで、区画溝とすることはできないようである。以上の延伸状況、附近的遺構、遺物出土状況を踏まえると、調査区中央に至る通路であった可能性が考えられる。

(5) 4B区より南側にあったと推定される遺構

今次調査区4B区の南壁とその南側で多量の弥生土器が廃棄された擾乱が確認されたが、近隣住民の話によると調査区より南側の工事の際に投棄されたものである。出土土器は須玖Ⅱ式にほぼ限定されることと、遺存状況が良好なことから、土坑などの遺構に伴う一括遺物の可能性が高い。そして、丹塗り土器の比率が高く、丹塗り土器の組成として甕、壺、高坏と器種組成が比較的良く揃っている。

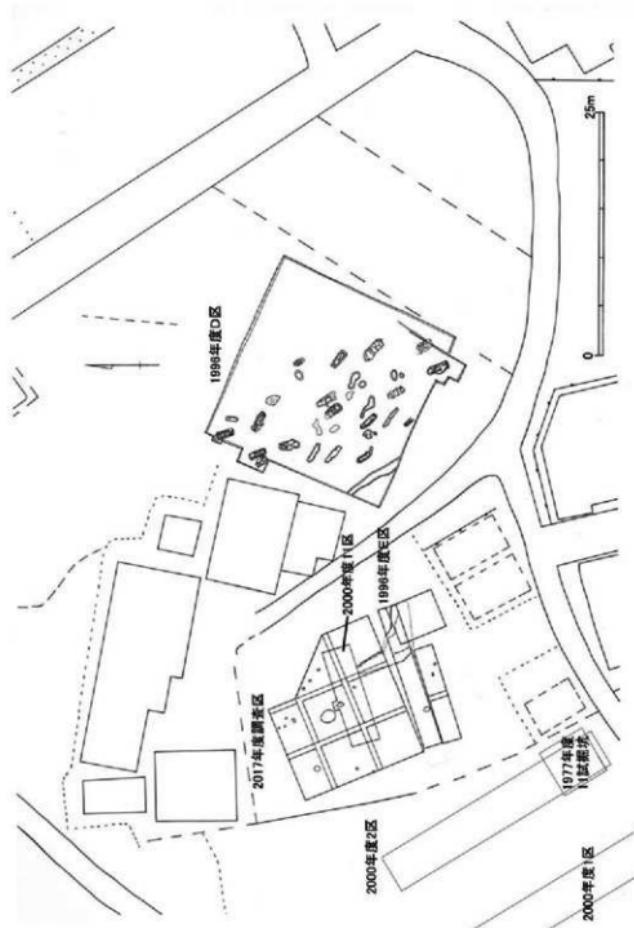


図43 2017年度調査区周辺状況

2000年度調査区1区と2区は南北に平行する4m×20mの調査区であった。このときの調査では地山層が北から南へ傾斜しており、旧地形は削平され、包含層は確認されなかった。南側で黒い土が埋め土に混じり、弥生土器がわずかに含まれていただけであったとされる。従って、遺憾なことであるが、今次調査区包含層遺物の供給源と目される西側の土地の弥生時代の具体的な土地利用情況については確認することができない。現況でも今次調査区と西側の土地では現地表水準で50cm程度の比高差があるので、弥生時代の段階では現況よりもさらに急な斜面であったものと考えられる。

2. 今次調査区と1996年調査D区墓域との関係（図43）

今次の調査区の東側には墓域（1996年度調査D区）がある（図42）。ここでは石棺墓12基、石蓋土壙墓5基、土壙墓1基、甕棺墓2基、土坑9基、集石遺構4基が南北方向に列状に確認されている。1号甕棺墓の年代は棺に用いられた大型壺からみると弥生時代後期後葉である。2号甕罐墓の年代は棺に用いられた壺からみると弥生時代後期前葉～中葉である。1号土壙墓の年代は出土した小鉢の年代から弥生時代後期後半～終末期であるとみられる。2号石蓋土壙墓の年代は出土した丹塗りの小壺から弥生時代終末期であるとみられる。7号石棺墓の年代は出土した小型仿製鏡から弥生時代後期後半であるとみられる。そのほかの石棺墓と石蓋土壙墓についての年代は不確実であるが、石棺の長軸・短軸比などから弥生時代後期前半から中頃のものと、弥生時代後期後半から終末期のものがあると考えられてきた。ただし、今次調査区の溝状遺構に該当する1996年度調査E区の溝は、このときの調査でも須玖II式土器が出土していることから、弥生時代中期後半の年代が考えられ、この遺構を墓域の区画溝と見做した場合は、D区の墓域も弥生時代中期後半から存在した可能性があるとも想定されている（安楽・西1999）。

とはいっても、D区の墓域で積極的に弥生時代中期まで遡る資料が確認されていないので、ここでは一応、弥生時代後期前葉～終末期に営まれた墓地であると捉えておく。今次調査区では弥生時代中期の遺構自体は存在し、弥生時代後期の遺構があれば、当然残存しているものと思われるが、そのような遺構は存在しなかった。また、出土遺物中でも今次調査区では弥生時代後期の資料はほとんど存在せず、2000年度調査11区包含層で弥生時代後期の高坏口縁部片が3点出土したのみである。そのため、1996年調査D区で墓地が造営されたとき、今次調査区はあまり土地の利用が活発ではなかったということがいえよう。

弥生時代後期に今次調査区が土地利用のほぼ空白域であったという知見が得られたことは、1996年調査D区で墓列の西側で発見された1号溝の解釈において重要である。1996年度調査報告段階で、既に1号溝については墓域の区画溝である可能性について言及されていたが（安楽・西1999）、今次の調査結果を踏まえ、墓域と空白域を区分する区画溝であることが確定的となった。

3. 勾玉の検討

今次の調査では4B区2層で勾玉が1点出土した。材質は翡翠（硬玉）である（本書「原の辻遺跡出土「勾玉」の科学的調査」参照）。これまで原の辻遺跡で出土した勾玉類を集成すると図44、表4のとおりである。図44-1, 3～7, 16, 17は甕棺墓、石棺墓などの墓地や、時期が比較的限定された単純層から出土した資料について遺構・層位の時期によって配列したものである。図44-2, 8～15は比較的時期幅の長い包含層等から出土した資料で詳細な時期を限定できなかった資料である。

原の辻遺跡で発見された勾玉の素材は天河石、翡翠（硬玉）、蛇紋岩、ガラスなどがある。天河石製勾玉は、石田高原地区2号甕棺墓（橋口甕棺編年K II a式）に副葬例（図44-1）がある。この勾玉は從来、緒縊形に分類されてきたが（森1980、木下1987）、石材からみて韓半島との関係も想定する必要がある。翡翠製勾玉は時期が確実な例では弥生時代前葉～中期初頭の石田大原地区14号石棺墓出土例（図44-3）、弥生時代中期後葉の川原畠地区出土例（図44-4）、原地区11号土壙墓出土例（図44-5）、弥生時代後期前半の原ノ久保地区6号石棺墓出土例（図44-6）があり、これまでのところ

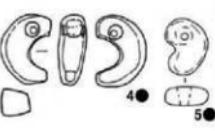
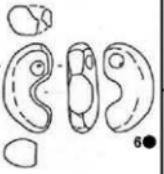
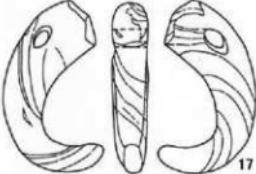
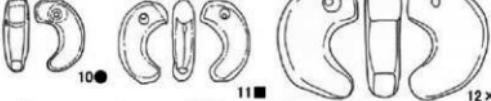
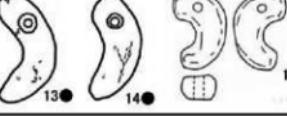
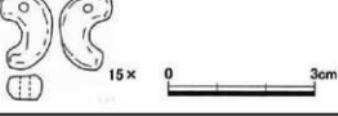
	天河石製	翡翠（硬玉）等 製	ガラス製
弥生時代中期初頭		 3●	
弥生時代中期後葉		 4● 5●	 6●
弥生後期時代前半		 7●	 16
弥生時代後期			 17
弥生時代中期～古墳時代前期	 2	 8● 9●	
		 10● 11■ 12×	
	 13● 14●	 15× 0	

図44 原の辻遺跡出土勾玉（番号は表4と対応）

表4 原の辻遺跡出土勾玉

番号	地区	出土遺構	材質	時期	文献
1	石田大原	2号要棺墓	天河石	弥生時代中期初頭(KⅡa式)	村川編2007
2	原		天河石	弥生時代中期～古墳時代前期	松見・山下編2006
3	石田大原	14号石棺墓	翡翠	弥生時代前中期～中期初頭	村川編2007
4	川原畠		翡翠	弥生時代中期後葉	山下・川口編1997
5	原	11号土壙墓	翡翠	弥生時代中期後葉	林編2009
6	原ノ久保	2号層	翡翠	弥生時代中期中葉～後葉	本吉
7	原ノ久保	6号石棺墓	翡翠	弥生時代後期前半	安楽・西1999
8	石田高原	9号溝上層	翡翠	弥生時代中期～古墳時代前期	鶴鳥・山下編1995
9	大川	墓域包含層	翡翠	弥生時代中期～古墳時代前期	宮崎1999
10	不鏽	6号溝上層	翡翠	弥生時代中期～古墳時代前期	杉原編1999
11	八反	2号水田跡	蛇紋岩	弥生時代中期～古墳時代前期	村川・西編2000
12	大川	墓域包含層	石材不明	弥生時代中期～古墳時代前期	田中ほか編2008
13	石田大原	2号石棺墓	翡翠	弥生時代中期～古墳時代前期	河合2002
14	石田大原	2号石棺墓	翡翠	弥生時代中期～古墳時代前期	河合2002
15	高元	包含層	石材不明	弥生時代中期～古墳時代前期	田中ほか編2009
16	大川	3号要棺墓	ガラス	弥生時代後期前半	藤田編1977
17	原ノ久保	9号土坑	ガラス	弥生時代後期	安楽・西1999

区3号要棺墓出土例(図44-16)と弥生時代後期の原ノ久保9号土壙出土例がみられる(図44-17)。

勾玉の寸法は翡翠製勾玉では小型のものが多いが、ガラス製勾玉は翡翠製に比べるとやや大きいもののがみられる。今次調査で出土した勾玉(図44-6)はこれまで原の辻遺跡で出土した翡翠製勾玉と類似した寸法を示す。

勾玉の形態は森貢次郎により獸形、緒縫形、牙形、半玦状、丁字頭、定形、不定形(円頭系、方頭系)、土製(丁字頭、定形、不定形)に分類されている(森1980)。また、木下尚子は範型は定形に求められるが、定形とみなすには不完全な勾玉を亜定形と呼ぶ(木下1987)。原の辻遺跡では天河石製の曖昧な形態の勾玉(図44-1)などを除外すると大部分が亜定形(不定形)勾玉か半玦状勾玉で、定形勾玉はガラス製の1点(図44-16)のみしか確認例がない。なお、原地区11号土壙墓出土例(図44-5)はソラマメ形を呈するが、小山雅人が指摘する半玦状を曲面化したもので、丹後地域や吉備地域、関東地方でみられるもの(小山1992)と類似する。今次調査出土例は半玦状ないし亜定形勾玉とみられるもので、原の辻遺跡では多く出土している型式である。特に頭部は直線的な面がある特徴を有する。河村好光の指摘する施溝分割技法(河村2000)により分割された後、曲面化が不充分な様相を示すものと考えられるが、同様の特徴は図44-4, 10, 15などでも確認される。今次調査出土勾玉は層序の上では須玖I式期～須玖II式期のものと考えられるが、類例が須玖II式期の資料(図44-4)にもみられることは、想定時期に齟齬がないことを示している。

定形勾玉は政治的最高レベルを示すかたちとして、完成された玉で、亜定形勾玉は政治的象徴のレベルは定形勾玉より低いとする指摘がある(木下1987)。原の辻遺跡では定形勾玉が1点のみ出土し、大部分は今次調査例も含め半玦状勾玉や亜定形勾玉であることは、これまで原の辻遺跡で突出した副葬品を具備した厚葬墓が検出されていないということと関連がある可能性が高い。

原の辻遺跡で勾玉が発見された箇所については、10例が墓地出土品や本来墓地に伴っていたと推測される墓域の包含層で出土している。溝出土例が2例と、水田跡出土例が1例みられる。このほか居住域での包含層出土事例が3点みられる。過半数が墓地での出土で、わずかではあるが居住域でも出土している。先に指摘したとおり今次調査で勾玉が出土した箇所のすぐ南側には、丹塗り磨研土器が多く量に伴う祭祀土坑があった可能性があるが、そうであれば今次調査出土勾玉も祭祀に使用された可

能性がある。また、原の辻遺跡ではそれ以前の時期にかけて使用されたことがわかっている。近年の研究では北部九州で立体的な翡翠製勾玉は弥生時代前中期(橋口要棺墓編K I c式)に副葬品として出現すると指摘されている(大坪2016)。原の辻遺跡ではそれにやや遅れる時期の翡翠製勾玉がみられるが、それはK I c式期の資料が限定されていることに起因する可能性がある。ガラス製勾玉は弥生時代後期前半の大川地

能性があるものとみられる。

4. 今次調査区の時期的変遷

(1) 後期旧石器時代

今次調査区の3層は2014年度原ノ久保地区調査区における2層と非常に類似した土層である。2014年度原ノ久保地区2層は後期旧石器時代（ナイフ形石器文化期）の包含層であるため、今次調査でも3層から後期旧石器時代の遺物が出土することが予想された。しかし、予想に反し、今次調査区3層では遺物の出土は認められなかった。表土からはナイフ形石器や台形石器などが出土しているので、周辺では人類の活動があった可能性があるが、当該地区での場の利用はほとんど認めることができない。

(2) 弥生時代

3層上面の標高状況により、当該調査区は西側が高く、東側が低くなる傾斜面であったようである。そのような環境下、弥生時代中期前葉～中葉に調査区中央の2B区に1号土坑が形成される。この土坑の機能・用途については廐棄土坑である可能性と祭祀土坑の可能性が考えられる。

2^丁層除去後に検出された12号ピットと13号ピットも調査区内では比較的古い時期の遺構である可能性がある。2層の下層である2^丁層では出土遺物が少なく、時期を特定することが難しいが、2層形成（須玖Ⅱ式期）より古い時期の形成であることには疑いない。

2A区の9号ピット、10号ピット、11号ピットは2層形成時（須玖Ⅱ式期）より前に構築されたことは明確であるが、その上限年代を把握することはできない。9号～11号ピットは一直線に配置され相互に関連を持つ遺構である可能性が高い。

これらの2層または2^丁層より下部で発見された遺構の性格はいずれも明確ではないが、須玖Ⅱ式期以前の遺構が調査区東側を中心に残っていたということは確実に認めることができる。そのような遺構が残っているという状況下、墓地関連遺構が確認されていないということは、当該地区が墓域ではなかったことを示している。

弥生時代中期後葉までには溝状遺構が形成される。溝状遺構は低い東側から、伸びてきて途中で北方に進路を変え、1A区で収束する。土地の稜線に沿う形ではなく調査区中央を目指して突っ切るように伸びており、その先に須玖Ⅱ式土器を用いた小堀廐棺墓も認められることから、通路であった可能性がある。4B区のさらに南側に須玖Ⅱ式土器を伴う祭祀土坑があった可能性が高い。また、4B区2^丁層から勾玉が出土しており（図23）、これもそのような遺構と関連がある使用であった可能性がある。

土坑、ピット群、溝状遺構が埋没した後、須玖Ⅱ式期に2層が堆積する。2層に含まれる土器片は磨耗を受けた小片が多く、これらの遺物の供給源はより西側の高い土地であった可能性がある。

今次調査区の東側は1996年度調査D区であるが、ここでは廐棺墓、石棺墓、土壤墓などが列状に配置されているが、この墓地の形成時期は弥生時代中期後葉～後期末であると想定されている。今次調査区では、成人墓はなくこの時期にも墓域としての利用はなかったものと考えられ、一段低い1996年度調査D区とは異なる土地利用がなされたものとみられる。

(3) 中世～近世

白磁碗IV類の出土がみられるため、11世紀後半～12世紀前半に周辺で土地の利用があった模様である。また、朝鮮時代磁器も出土しており、周辺でのこの時期の土地利用もあったものと推定される。近世の磁器は18世紀後半から19世紀前半の資料が多くみられ、この時期に周辺での活発な土地利用があったものと推定される。

(4) 近代

土地の高い調査区西側は削平される一方、土地の低い3B区北側や4A区東側などでは埋土がなされ、全体的に土地の平坦化が行われた。表土にみられる磁器や錢幣の年代からは明治時代から現代に至るまで継続的に利用されていたことがわかる。

安楽勉2001「原ノ久保地区の調査」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集

安楽勉・西信男1999「原ノ久保 A 地区の調査」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集

大坪志子2016「弥生時代における九州のヒスイ製勾玉の系譜」「韓・日の装身具」嶺南考古学会・九州考古学会

河合雄吉2002「原の辻遺跡」石田町文化財調査報告書第5集

河村好光2000「ヒスイ勾玉の誕生」『考古学研究』47- 3

木下尚子1987「弥生定形勾玉考」「東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集」同朋舎出版

小山雅人1992「弥生勾玉の分布とその変遷」「究班」

杉原敦史編1999「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集

副島和明・山下英明編1995「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書第124集

田中聰一・松見裕二・山口優編2008「特別史跡 原の辻遺跡」壱岐市文化財調査報告書第12集

田中聰一・松見裕二・山口優編2009「特別史跡 原の辻遺跡」壱岐市文化財調査報告書第14集

林隆広編2009「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第39集

藤田和裕編1977「原の辻遺跡（Ⅱ）」長崎県文化財調査報告書第31集

松見裕二・山口優編2006「特別史跡 原の辻遺跡」壱岐市文化財調査報告書第9集

宮崎貴夫1999「大川地区的調査」「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集

村川逸朗編2007「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集

村川逸朗・西信男編2000「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第20集

森貞次郎1980「弥生勾玉考」「鏡山猛先生古稀記念古文化論叢」

山下英明・川口洋平編1997「原の辻遺跡・安国寺前 A 遗跡・安国寺前 B 遗跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集

2017년도 하루노쓰지 (原の辻) 유적

하라노쿠보(原ノ久保)지구 발굴조사 성과

2017년 11월 1일~12월 28일에 걸쳐, 하루노쓰지유적 남부 묘역 주변의 토지 이용을 밟히기 위해 발굴조사를 실시하였다.

이번 발굴조사에서는 토갱 2기, 구덩이 13기, 구(도량)상 유구 1조가 발견되었다. 1호 토갱은 야요이시대 중기 초두·전엽의 것인데, 독립적으로 구축되었다. 야요이시대 중기 후엽 이전에 구축된 9호 구덩이는 열(列)상 배치되어 어떤 시설이 있었던 것으로 보인다. 구상 유구도 야요이시대 중기 후엽 이전에 구축되어 통로로 이용된 것으로 추정된다. 이번 조사지구에서는 성인묘는 발견되지 않았다. 묘지로는 공백구역이었다고 생각된다.

출토유물로는 야요이토기, 곡옥, 마제석검 등이 발견되었다. 주변에서 제사가 행해졌을 가능성을 나타내는 귀중한 성과를 얻었다. (訳：古澤義久，校：金恩瑩)

2017年度原之辻遗址原之久保地区的考古发掘

2017年11月1日至12月28日,长崎县埋藏文化财中心对原之辻遗址南侧进行了考古发掘。此次发掘共发现灰坑2座,小土坑13个,灰沟1条。其中,编号为1的灰坑年代为弥生时代中期早段,是独立存在的。编号为9~11的小土坑排列有序,年代在弥生时代中期晚段,疑似建筑物留下的柱洞。灰沟形成于弥生时代晚段稍早,推测为道路痕迹。在此次发掘中,没有发现成人墓葬,此处为墓地的可能性较小。出土遗物中有弥生时代陶器、勾玉、磨制石剑等。这些遗物是表明在其周边举行过祭祀活动的重要成果。

(訳：王達來)

原の辻遺跡出土「勾玉」の科学的調査

長崎県埋蔵文化財センター 片多雅樹

平成29年度原の辻遺跡調査研究事業による原の久保地区での調査では、鮮やかな緑色を呈した勾玉1点が出土している。ここでは、長崎県埋蔵文化財センターに導入されている科学分析機器を用いた本資料の調査結果について報告する。実施した調査は、透過X線撮影、比重測定、蛍光X線分析、顕微鏡観察、電子顕微鏡観察である。

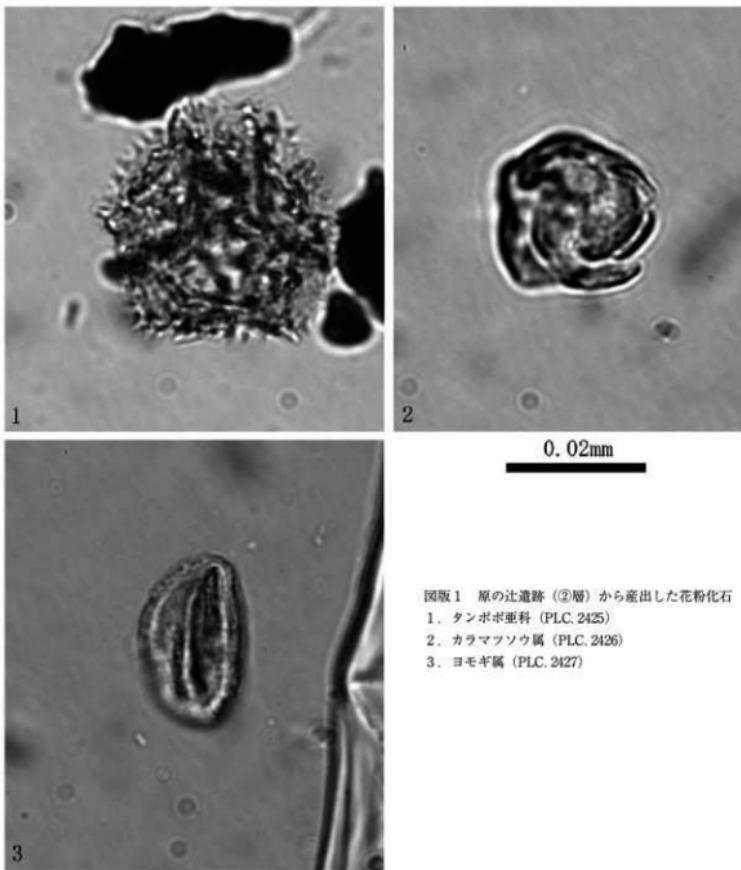
透過X線撮影では左右からの穿孔が上下にズレている状況が見て取れる(図1)。比重はアルキメデス法により算出した。すなわち資料の重量を体積で割った値であり、ここでは体積の測定に水中重量を用いた。重量測定には、METTLER TOLEDO社製の精密上皿天秤(XP2003SDR)を使用した。機器仕様は、ひょう量(最大計量値):2.100g、最小表示:0.001g。通常、体積の測定は天秤の底部から資料を吊るして流壺(蒸留水)に浸し、重量の減少分(=浮力)を体積とするが、ここでは蒸留水の入った容器を天秤に設置し、風体をゼロに設定した状態で資料を手で吊るして蒸留水に浸し、液体重量の増加分を体積とした。資料を吊るすのには、極力体積の小さいかつ石製品を吊るした状態で維持できる材料として毛髪を使用している。測定の結果、重量は2.106g、水中重量(体積)は0.615gで、比重は3.42となった(表1)。

蛍光X線分析法は、資料にX線を照射することで、資料表面から発生する特性X線(=蛍光X線)の強度を調べることにより、対象に含まれる元素の種類と含有量を調べることができる。今回は2機種のエネルギー分散型蛍光X線分析装置で非破壊分析を実施した。2機種の大きな違いは分析範囲で、それぞれの装置仕様は次のとおり。EDAX社製のEAGLE III XXLは、上面照射式で、照射径は0.3mmΦ、Rh(ロジウム)管球、半導体検出器の冷却に液体窒素を要する。分析条件は、管電圧40kV、管電流は抵抗値によって自動設定とし、真空雰囲気で測定時間は100秒で実施した。分析結果を図2に示す。主成分であるケイ素(Si)のほかアルミニウム(Al)、鉄(Fe)、カルシウム(Ca)を検出した。SIIナノテクノロジー社製(現日立ハイテクサイエンス社)のSEA1200VXは、下面照射式で照射径は8mmΦ、Rh(ロジウム)管球、半導体検出器は電器冷却のため液体窒素を要しない。分析条件は管電圧40kVで管電流は抵抗値によって自動設定とした。大気雰囲気で測定時間は100秒で実施した。大気雰囲気での分析のため、岩石の主成分であるSi(珪素)を含む軽元素の検出には15kVでの分析を併用した。分析結果を図3に示す。カルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ケイ素(Si)のほか、鉛(Pb)を検出した。この鉛の由来を調べるために实体顕微鏡で表面を拡大観察すると茶色い土状のものが付着しているのが確認され、更に走査型電子顕微鏡(日本電子製JSM-6610LA)の反射電子像で観察すると、その茶色様の付着物の輝度が高く(図4)、即ち原子番号の高い物質だとわかり、電子顕微鏡付属の蛍光X線分析では高い比率で鉛を検出した。

比重測定及び蛍光X線分析の結果から、本資料はヒスイ(硬玉)製であることがわかった。鉛を主成分とする茶色様付着物は赤色顔料である鉛丹であった可能性もあるが、汚染土壤が付着残存している可能性も考えられる。また、顕微鏡観察では孔周辺にわずかに欠損痕が見られ、これらは玉ズレの痕跡とも考えられ、元々は小玉や管玉などと連結して使用されていた可能性が考えられる。

(参考・引用文献)

大坪志子2015『縄文玉文化の研究—九州ブランドから縄文文化の多様性を探る—』雄山閣



図版1 原の辻遺跡（②層）から産出した花粉化石

1. タンボボ亜科 (PLC. 2425)
2. カラマツソウ属 (PLC. 2426)
3. 日モギ属 (PLC. 2427)

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	原の辻遺跡調査研究事業調査報告書						
卷次							
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第32集						
編著者名	古澤義久(編)・寺田正剛・長岡康孝・片多雅樹						
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 電話(0920(45)4080						
発行年月日	西暦2019年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐市 芦辺町深江平触	42424	72-92	33°45'30" 129°45'55"	2017 11. 1 ~ 2017 12. 28	220m ²	原の辻遺跡調査研究事業 (国庫補助事業)
取録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原の辻遺跡 (原ノ久保地区)	墓地	弥生時代	土坑・ピット・溝状遺構	弥生土器・勾玉・弥生時代石器			

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第32集

原の辻遺跡

2019（平成31）年3月25日

発行 長崎県教育委員会
長崎市尾上町3番1号

印刷 株式会社 昭和堂